佐々吉永家文書 毎年記録 現代文

(1頁)

佐々村潟大新田造成記録

一、寛文四甲辰(二六六四)年、赤崎より工事が始まる。

御家老山瀬新五兵衛殿がお見えになられた。

一、延宝三乙卯(二六七五)年一〇月、潮止め工事が完了。

足掛け一二年を要し、防潮堤造成工事が完成。

完成した防潮堤で竜神祭が催され、大神楽奉納。

御普請奉行 吉村市郎左衛門殿 御支配

大小頭 吉永七郎右衛門

同 廣川善右衛門

一、延宝四丙辰(二六七六)年、初めて作物の植え付けが始まる。

一、貞享二丁丑(二六八五)年五月二三日夜、洪水が起こり、大新田の堤防

の内、赤崎、いわし淵、蔵の下の三方所が決壊。防潮堤完成から一一年目の

ことで、六月から復旧工事が始まり、一〇月に潮止工事が完了。

(2頁)

一、貞享三丙寅(二六八六)年一二月末から検地が行われる。

検地奉行 山口伊右衛門殿

御郡代 山田宇平次殿

手代 山口兵左衛門殿

永石六左衛門殿

一二月末、検地が終わる。

一、貞享五辰(二六八八)年二月、須崎横道通りから沖方免までの検地が始まる。

検地奉行勘定頭 金丸弥七兵衛殿

御郡代 山田宇平次殿

手代 近藤孫右衛門殿

同 西川儀左衛門殿

合計

一、水田五一町七反八畝二一歩半

高 七百九十九石四斗三升九合

右が造成された大新田の年貢として納める分

一、水田五五町四反二畝一九歩

高 八百三十六石七斗三升二合

(3頁)

合計、右は大新田堤防潟の外の年貢分。古い石垣がある。

一、寛政九巳(二七九七)年、年貢米納入帳の写しで、納め高は左の通り。

大新田

一、水田六四町四反五畝九歩半

高、千三一石三斗四升三合

から

内、一二町七反九畝二〇歩

高、二百三三石二斗一升一合 よろず引高

残して

五一町六反五畝一九歩半

高、七百九八石一斗三升二合が年貢として納める分。

一、安永二癸巳（二七七三）年閏三月二〇日、大新田荒地と見られる所の檢

地が行われ、年貢高が決まる。

檢地奉行勘定頭 川尻武右衛門殿 代官 原幸左衛門

御郡代 井上宗左衛門殿 庄屋 橋本貞八

役人帳元 有浦今右衛門殿 浜使 恋塚兵八

手代 南部金次兵衛殿 里初頭 梶右衛門

同 村木衆之助殿 古川初頭 喜右衛門

同 中倉郡之丞殿 口石初頭 櫛右衛門

同 雪浦崎右衛門殿 里五人頭 林左衛門

同 国富小善太殿 御普請組大小頭

吉永斧左衛門 三七才

いわし渚で、唐網を打って、てんま船で横田留蔵と吉永斧左衛門の二人、大鮎

（4頁）

小鮎、鯰を採って土手で直ちに酒宴となる。

一、大新田赤崎大井樋大うて側に必要な土取り場で小浦の助次郎が作っている田は、本えご沿いの横幅が一間の通りがあり、えごさらいの時左右へ土砂を掘り上げた場所である。そのような所なので今まで年貢を差し引いていたが、その土地の中で一反を土取り場と決め、年貢をかけないことになった。瀧左衛門が作る田も同様、そのほかのえご沿いの田も同様である。本堤防の緊急な工事が発生した場合は状況にまかせて工事用の土を取り、後のことは御見分の方から、どうするか指図があるだろうから、その間、その様にわきまえておくべきだと思ひ書き記しておく。 吉永斧左衛門

同二一日雨天、御清帳の決算をする。

同二二日、相神浦のように檢地奉行他がお越しになり、川下新田も同様の檢地が行われたとのことである。

一、いわし渚は荒地と渚合わせて四反七畝一〇歩で、その内、一反を土取り場として残し、三反七畝一〇歩を堤防用の土取り場として受領させて頂くよう斧左衛門が願いを差し出した。

（5頁）

安永三年（一七七四）年三月、願ひ通り認めていただき、飯野幸太夫殿の保証も頂いた。郡代 井上宗左衛門殿・代官 原幸左衛門・庄屋 橋本貞八の代りを済ませて受け取った。

一、安永三年（一七七四）年三月二〇日、小浦潟地を光明寺塩浜新田とする造成願いを出したところ、大新田の外側にある古い石垣内の荒地扱願の見分があった。

御奉行	中嶋十蔵殿	代官	原幸左衛門	平組	坂口太次衛門
勘定頭	飯野幸太夫殿	庄屋	橋本貞八		石田郡助
御郡代	井上宗左衛門殿	御普請組	大小頭	吉永斧左衛門	
帳本	永石常之助	小頭	石田武助		
手代	南部金次兵衛殿	同	真藤有右衛門		
同	木寺富三郎				

（6頁）

右、満潮のとき、船から一通り見分して潟から上陸され、年貢が決められた土地の中の荒地について検地がなされた。三艘の乗り船にかねのて矩手からお乗りになり、十蔵殿の御指図で、御自身が乗船される船には幸太夫殿・宗左衛門殿・幸左衛門・斧左衛門・武助・貞八・兵八も皆共に乗船せよ、とのお指図でその船に乗り組み、御見分が終った。兵八宅にお寄りになり、お酒をいただいた。光明寺から銘酒一桶と一樽が届けられ、浦目付 下川芳右衛門・青木小左衛門と光明寺の役人で十之助という人も加わった。小浦肝煎・樽左衛門・清吉・里村筆取友八・口石初頭榎右衛門・里扱頭右衛門や地区の老人も出て来る様にとのこと、左平次・孫左衛門他大勢の者が参加した。この度の古石垣内荒地の見分後、そこは新田として認められるであろうから、その間

はその場所内は石一つたりとも手を触れない様心得ておくように、と十蔵殿が申し渡されたので書き留めて置く。

一、光明寺塩浜新田の願いを通り、安永三年（一七七四）年七月から工事に取いかかり、同年一月二三日潮止工事が完成した。

一、安永四末（一七七五）年三月末頃から塩の生産が始まった。

一、安永二癸巳（一七七三）年、黒石新田造成工事の潮止工事が完成した。

古川の酒屋、青木小左衛門と石田武助両名の共有で、安永三きのえうま甲午（一七七四年）から米作りが始まった。安永五申（一七七六）年五月二五日、雨風で堤防が決壊した。

一、安永三甲午（一七七四）年、正月から新しい水返し一ヶ所の工事に取掛

かった。段平船の手配をお願いし、差回して頂いた。船頭は今西六太夫。はねの長さは二十間、横幅は四間にも及び、高さは七尺に築き上げた。

（7頁）

一、安永四末（一七七五）年一〇月四日、赤崎土取り場で小浦の助次郎が耕作している田の検地があり、去年、改められた通り決定した。普請の時に土取りを始めるまでは、以前決められていた年貢となる。年貢台帳の書式に従い、互いに取り決めた。土が足りないときは何時でも、断りなく自由に土を掘り出せると言う事である。

検地奉行	嶋井助五平殿	代官	大浦小一左衛門
御郡代	井上宗左衛門殿	庄屋	吉田五右衛門
帳本	都野川郡兵衛殿	浜師	福田形右衛門

手代 浦瀬辰平殿 大小頭 吉永斧左衛門

その外、小役人達と耕作者の立ち合いで取り決めたので書き残しておく。

一、安永四未（一七七五）年八月三日、口石村の大浦弥太六を大新田の水門見張り番役に決め、働いてもらう。

一、安永四年末、赤崎の水門の地盤の岩を切り込んだ。一つの水門は一尺切り込み、沖の方の一つは同じ様に四寸ほど切り込んだ。

一、安永六西（一七七七）年の冬から翌年の戌年にかけて、東光寺の庫裏の修理をした。

一、安永八亥（一七七九）年六月一七日から大新田水門の西側の一つを新しくやり替えた。水路の幅 四尺五寸 長さ 五尺八寸

右の記録は口伝えに先祖から伝えられたもので、父親斧左衛門がそれらを書き残し、それを文化四丁卯（^{ひのぞう}一八〇七）年四月三日書き改めた。

（8頁）

先祖書

吉村市郎左衛門殿御代

一、吉永佐之右衛門は一六才の時、御普請足輕役を命じられ、三年間お勤めした。

次に小頭を三二年間、大小頭を二七年間、合計六二年間お勤めして、お暇を願ったところ、中小姓役を命じられ、毎年心付けとして、米三俵を頂戴した。

その子右伝次は、父親佐之右衛門の在勤中に大小頭見習いとして九年間お

勤めした。本沢甚兵衛殿の御代の時に父の跡を継ぎ大小頭を仰せつけられ、

四二年間勤めてお暇を願ったところ、父親同様、中小姓となり、心付けとしてその時米二俵を頂戴した。

その子斧左衛門も父親の在勤中八年間見習いをし、父親が退いたあと直ぐに大小頭を仰せつけられた。御頭馬淵八郎左衛門殿の御代の時で、合計二一年間勤務し子年の十一月八日に病死した。

その子右伝次は父親斧左衛門の生存中、城半右衛門殿にお目見えして小頭助鉄砲役となり、子年の五月と一〇月にその役を二度勤めた。その後、子年の一二月二九日に父親死去の後の大小頭は石田武助がつぎ、同日右伝次が小頭役となった。一五才の時である。寛政二戊（一七九〇）年六月二三日、森田十左衛門殿の御代に大小頭見習いを仰せつけられ、一一年間勤め、小頭と合わせて二一年間お勤めした。

右の小頭在勤中に森田十左衛門殿頭付きとして、大坂で一年間、そして同人に今福事件の時は六〇日お付きした。また神戸勝左衛門殿に付き、江戸で一年間勤務した。

（9頁）

卯一二月近藤郡太夫殿の御代、父親の名乗りである斧左衛門と名を改めた。

一、寛政一二申（一八〇〇）年四月二〇日、吉永斧左衛門、石田与兵衛の跡を受けて大小頭を仰せつけられる。御頭高橋市左衛門殿の御代である。

（10頁）

先祖から四代目の吉永斧左衛門 書留

一、天明元丑（二七八二）年正月元日、大雪のため組中すべて渡海することが出来ず、その日は日野浦で宿泊した。

一、同年正月二日、御普請組の仕事始め。長屋で組の者はお酒等頂戴して終る。

一、同年春、栗林の新堤工事に取り掛かるため出勤し、黒石堤の導水管の取替工事をした。

一、天明五巳（二七八五）年八月二八日、城半右衛門殿が御用で登城なされたところ、新組を任せられ、同日、普請組は坂為左衛門殿に預けられた。

九月二日、組の引き渡しがあり右伝次は直ちに任務に備え待機した。

一、天明七未（二七八七）年二月二〇日、坂為左衛門殿、体調がすぐれず役を返上されたので、安藤庄兵衛殿の仮支配となった。同年九月の参勤交代の時、大坂において、留守居役の森田十左衛門殿に普請組の支配を任された。

天明八申（二七八八）年二月一八日、右伝次は人足一人を連れ、御頭森田殿の付人として老岐行きの船で平戸を出帆した。瑞雲寺の和尚とお供二人、台所調理方の安永度右衛門と船手から上乗りとして一人乗船し、老岐の印通寺港に到着、一日停泊した後、鬼の岩屋等を見物した。

三月一三日、大坂に到着、すぐに中の嶋屋敷を訪問し、酒樽と肴を差し上げた。

一、申三月一九日夜、ご帰国途中の殿様が大阪にご到着。同二〇日は一日中大坂に滞在され、大坂城でお勤めを果たされ、同二二日、大坂をお立ちになる。

滞在中、竹哉殿・藤蔵殿・善八殿が面談。

（11頁）

一、同年八月、森田十左衛門殿は大坂において、大目付役をお受けになられた。

同年九月、後の大阪詰め役は葉山左内殿が仰せつけられ、一〇月二日に船でお着きになり、交代された。

同二六日、十左衛門殿は船に乗り込み平戸に向かわれたが、余りにも船が遅延するので、一二月三日、筑前姪浜で上陸して陸行、唐津を経て同六日、平戸に到着した。右伝次・為八・五郎吉がお供をした。

一二月一四日、大小頭武助、小頭と組中のすべての者が登城して、一五日立石左兵衛殿から普請組詰所への引き入れがあり、一六日は平戸に留まり一七日は稽古があつた。一八日は皆帰郷して一九日は休日、二五日は平戸の詰所へ出勤した。

一二月二七日、それぞれの組の大小頭達が新馬場の見分を仰せつけられ登城し、武助もやって来た。西正月三日、稽古の陣立てが前回と違うとの事だつた。三日早朝から赤塗御門内に出かける。ほどなく殿様が三重櫓に御出座されたので、陣立ての諸隊は新馬場に入場し、組頭は席次に従って床几に掛け、先導の者には指物を持たせ、組を二隊に分け前方から陣立てをして次々に繰り出す。御普請組の者達は末席で控えた。

一、年号が代り寛政元（二七八九）年となる。

一、同年五月六日、幕府の上使が平戸に到着され、使者用の屋敷として吉村、谷村両家が御宿になる。一行は同七日に渡海して佐々で昼食、中里にお泊りになった。佐々まで出向いてのお世話役には戸川織右衛門殿、御門の立ち番は普請組から差し出し、松小紋の羽織と棒は平戸から届いた。いずれも戸川織

右衛門殿の手配である。

(12頁)

御指図を受けてお勤めする。

- 一、寛政二戊(一七九〇)年二月八日、今福の一件で御頭の付き人として出向いた。出向いた人数と滞在した日数は左記の通り。

- 一、御先手頭御奉行 瀧川権左衛門殿が引き連れた組の者上下合わせて八人。

大小頭 老岐与次左衛門

- 一、御普請組頭・大目付 森田十左衛門殿上下合わせて八人。

吉永右伝次・坂口重右衛門・横田甚助・若党 安村金次・人足三人。

同九日、調川より組に対し呼出しがあり、大小頭 石田与兵衛・小頭 出口喜

三次と平組から二人出向く。

- 一、御先手頭 村尾覚助殿は上下合わせて八人引き連れてみえる。

大小頭 井元要八

- 一、御城方役頭 原半平殿は上下合わせて五人。後に今福押役を仰せつけられる。

- 一、勘定役 吉木形右衛門殿は上下合わせて五人。

- 一、志佐筋御郡代 牧山権右衛門殿は上下合わせて四人。二月五日出立。

- 一、下目付 出来嶋利助殿は上下合わせて三人。

- 一、大納戸物主 深見又次右衛門殿は上下合わせて三人。

- 一、奉行衆書役 貞方多市殿は上下合わせて二人。

右の人数、二月八日平戸を出立して、調川村に到着。九日に入る予定が

遅れて一〇日に今福に到着。肥前佐賀藩も浦の崎に役人衆を出している

の事、相手方と話し合いになり、順次逃げ出した者を取り鎮めたり拘束したりして事態を収集する。今福からの退去の手順は左記の通りである。

- 一、二月九日、御家老 松浦縫殿殿が調川庄屋に、与力組の上下合わせて三〇人余りを召し連れ出向き、同二八日退去。

(13頁)

- 一、御奉行 秋山茂右衛門殿、二月九日上下合わせて八人が出向き、同二八日退去。

去。

- 一、御用人見習い御家老手付 古川右衛門兵衛殿の上下五人、右に同じ。

- 一、新組頭 真壁源五太夫殿、上下合わせて五人と組の者一五人。小頭二人、

大小頭 小西幸右衛門。

- 一、新組頭 安藤庄兵衛殿、上下合わせて五人。組の者と小頭は右に同じ。

大小頭 霜川和左衛門

- 一、新組頭 鳥居兵庫殿、上下合わせて五人。組の者と小頭は右に同じ。

大小頭 大石貞六

右の方三人は志佐あたりまで船で回られる。

今福において召し取った者二六人を、御先手の者が調川御庄屋まで連行し、二

月二六日に源五太夫殿・兵庫殿両人の新組に引き渡す。二六日の夜を通して平戸

に連れて行き、同二七日入牢させる。

- 一、相神浦御普請頭 立石奎兵衛殿上下合わせて五人。御組一五人

小頭一人 大小頭 郡郷右衛門

一、御堺奉行 中嶋奎右衛門殿 上下合わせて五人

右御兩人、二月九日、横辺田御堺通りまで出向かれ、三月四日、引取られる。

一、御作事奉行 市山恒八殿、上下合わせて四人・才料二人

一、右同役 原右内殿、上下合わせて四人・大工一人

右御兩人、二月八日御出役、同二九日御引取り

一、大納戸役人 南部勇平殿、上下合わせて三人。二月八日役のため出向き、三月二日引取る。

(14頁)

一、御家老書役 神田直治殿、二月八日、上下合わせて二人出向かれ、同月二九日引取られる。

一、御台所 松永瀧右衛門殿、二月八日、出向かれ、同二九日引取られる。

一、右同断 山崎八百七殿、右同日、出向かれ、三月一四日引取られる。

右

右の事件では、今福在郷の住人で一五才以上の者は残らず今福から立ち去り、肥前浦の崎小松山に思い思いに小屋を作り居座ってしまった模様。

この件について瀧川・森田のお二方が二度も久原の押役所屋敷まで出向き、また佐賀領の役方もお越しになられた。江迎庄屋にて御対談があり、二月二四日、二五日に今福住人らは順次それぞれ家々に引き上げた。

同二六日江迎庄屋に住人皆残らず呼び出しになり、法を定めた書付を読み

聞かせ、その上で一人ずつ名前を呼ばれて尋問があり、まず二四人、その前に二人、その後四人、都合三〇人が召し取られて縄を掛けられ平戸へ送られた。

右の事件はそれぞれに終息し、今福に出勤した役人等は迎えに来た早房丸に乗船し、瀧川、森田ほか代役の方々も四月八日に引上げられる。原半平殿は押役として残り、足軽二人が配下として付けられた。

今福事件の首謀者で常七と申す者は二月二五日夜逃亡し、行方不明となっていたが、その後、聞き込みを重ねて召し取り牢に入れる。その後、常七は入牢中に病死したので常七一人だけ、その死骸の首を落し晒し首とした。

(15頁)

一、寛政二戊かんせい(二七九〇)年八月九日森田十左衛門殿が御用との事で登城なされたところ、御先手組をお任せになられ、同日、神戸勝左衛門殿に御普請組がお任せとなる。同一日引継があり、直ちに右伝次も配下として詰める。

一、同四子年七月二三日夜大風が吹き、近頃がない大損害。頭詰として御勤めのことである。米など次第に高値になり、一俵が二八・九匁、三〇目余にまでなる。

一、同五丑年正月三日軍事訓練。御普請組頭は勝左衛門殿。非常に寒く苦勞した。

一、同年正月二八日、勝左衛門殿は江戸詰めを仰せ付けられ、右伝次を頭詰めとして召し連れ、丑三月一二日、自宅を出る。同二〇日平戸を出港、同二六日下関着。乗り合わせた人数は左之通り。

一、御普請組頭 神戸勝左衛門殿 上下合わせて七人

吉永右伝次・山川栄治・世知原幸助、人足として富蔵・百太郎・五郎八メ

一、御長柄奉行 岩永八郎太夫殿、上下合わせて六人 田平から

一、御用人見習 山鹿伊織殿、上下合わせて五人

乗合四人、上下二人

一、近藤岐文殿 上下合わせて三人

四月三日、隙をもらつて伊織殿・岐文殿が乗船している伊勢丸に乘せてもらい、午後二時頃多渡津に着船、金毘羅宮に参詣した。行程六〇町三里。暮れ過ぎ帰途に就き、桜屋と申す茶屋で酒、茶づけ等食べ、夜通しで帰る。夜半頃本船に乗船。

(16頁)

同五日、兵庫にて万吉丸に乗船。六日夕方安治川に入る。七日、大坂に上陸し、八日九日と逗留。九日夜、船に乗り十日伏見に到着する。支度など整えて出立、木曾路を旅して、四月二四日、滞りなく江戸に着き、見物などする。

一、同年六月一九日、幕府から書状が届き、お殿さまは神田橋御門番を仰せ付けられる。御頭勝左衛門殿が御番所御使者をお勤めになる。即日御番所役の引継ぎがあつた。御番頭 戸川織右衛門殿・神戸勝左衛門殿・番目附 深江与五平殿・久間貞八殿・千浦庄七殿・近藤岐文殿・平土 磯野定兵衛殿・岡清兵衛殿・岡野庄之丞殿・その外表向きの方々が代りあつてお勤めされる。御徒士目附御組小頭、足輕下座見等の雇い入れもする。一〇日間で交代し、藩内の者は五日間での交代である。

一、七月二六日、勝左衛門殿が病気になる、神田橋御番頭を辞退したいと願いを出され、お役御免になられる。直に国元へ帰国するよう仰せがあり、九月六日江戸を出立、八坂玄悦殿を同道して甲州木曾路を通り、二三日大坂に到着。二五日早船に乗り安治川から出船、十月一四日朝、平戸に着船する。栄治、幸右衛門と人足で吉田村の久作と申す者も連れて帰国、一五日佐々に帰る。

一七日、与兵衛殿と組中すべての者又平戸に行き、一八日道具を引き揃え、一九日稽古を終える。

(17頁)

一、寛政六寅(一七九四)年三月一四日、勝左衛門殿死去につき普請組支配役を返上なされた由、与兵衛殿と参り合わせ、喜三次が詰所に待機する。立石 左兵衛殿が仮支配になられる。

一、同年一二月二三日、近藤郡太夫殿に普請組の支配をお預けになる。卯四月初日、道具を組詰所に引き揃えてただちに待機する。

一、寛政七乙卯年六月朔日から御改正のお指図があり、去年寅年の分と、当正月から五月迄の両普請組勘定を調べて差し出す様に、との申し渡しがあつたので、急ぎ仕上げで差し出す。

一、佐々組支配の普請奉行 木寺紋右衛門殿より通達があり、日々の出勤は銘々、組の出勤簿に押印をして、大小頭も毎日確認の署名捺印するようにとのことだった。

一、川下組御普請奉行 中田万之丞殿も右に同じ。御普請場での出勤、退出、休み時間、勘定場の定書は左の通り。

一、午前八時頃出勤。昼休み前に一步ホ(約十二分)ずつ二回休み。正午頃から昼食時間休みとして四歩(約四分)。それから一歩ずつ二回休み。午後四時頃、仕事を引き上げる。

(18頁)

右の通り日々の出勤定めは両組とも御勘定所に書き出して置く。

一、御領分郷普請方奉行に、山口野左衛門殿と今浦番助殿が任命される。

一、同年八月一四日、大新田外潟塩浜造成工事の申し渡しがあり、山口野左衛門殿、木寺紋右衛門殿、中田万之丞殿による予定地内の下調べをする。

一、同一五日御見分御立合い人数、左の通り

御奉行

神戸衛土右衛門殿

御郡代

沢村弥惣衛殿

普請奉行

木寺紋右衛門殿

勘定役

日高治左衛門殿

普請奉行

山口野左衛門殿

右同断

中田万之丞殿

帳本

南部曾平殿

庄屋

松田勘六

手代

長嶋五平次殿

小佐々同

大浦宗助

同

大曲助治殿

浜使

田嶋孫次郎

代官

牧山左忠次殿

作目付

宮原治藤太

大小頭
石田与兵衛
里村 初頭
安左衛門

小頭
吉永右伝次

平組
横田直右衛門

同

出口要蔵

右人数で立合い見分をする。

(19頁)

一、同年九月九日、三社宮御幸願いを一日で済ませ帰宅。

一、同年一〇月一四日、中国地方の三田尻から浜師を御雇いになり、呼び寄せられた。田助さつまやの喜市が同道して四人の浜師を連れて来た。

同一五日、立合い見分の人数は左の通り。

普請奉行

山口野左衛門殿

右同断

木寺紋右衛門殿

大小頭

小頭

平組

石田与兵衛 吉永斧左衛門 横田直右衛門

庄屋代

山守友助

浜使

田嶋孫次郎

里村

初頭安左衛門

小役人中

三田尻浜師

浜屋庄兵衛

西村屋 松右衛門

太平 三人

一、御領内の潟地で、塩田としてここはと思われる場所はついでに見分をするように、との仰せがあったので、木寺紋右衛門殿が大小頭代役の吉永斧左衛門・出口要蔵・才料等に浜使を三人、喜一等を連れて巡回した。

斧左衛門に荷馬一匹を与えられ、雑役夫を用意した。

一、同十月二〇日、川下瀉を見分、同二一日立合。

一、普請奉行 木寺紋右衛門殿 川下大小頭 馬場崎右衛門 小頭御組

一、右同断 中田万之丞殿 吉永斧左衛門 初頭徳右衛門

出口要蔵 小役人

一、代官 立石権助 才料 松野豊助(これは木寺氏の付人) 浜師 四人

一、山口庄屋 亀嶋平之助

一、新田庄屋 末永義左衛門

(20頁)

一、同二三日、佐世保瀉を見分。

一、普請奉行 木寺紋右衛門殿 代官 里森弥三右衛門 吉永斧左衛門 松野豊助

一、右同断 中田万之丞殿 庄屋 富川和太助 出口要蔵 初頭 筆取 浜師

一、同二十四日、早岐広田かかりの大手原瀉を見分

普請奉行 里庄屋 大小頭 才料

木寺紋右衛門殿 豊村留平次 吉永斧左衛門 松野豊助

代官 広田庄屋 平組 浜師四人

七種笹右衛門殿 豊嶋重兵衛 出口要蔵 小役人中

一、赤子外瀉を見分。こぶすわ瀉は早岐町原惣市の願いで、辰巳(寛政八・九年、

一七九六・七年、新塩田として造成した。

一、同二七日、江迎瀉を見分。堤防の長さ千百間(約二キロ)。面積は四十町六反

余

代官

普請奉行 山口民左衛門 吉永斧左衛門 松野豊助

木寺紋右衛門殿

庄屋

富野平助 出口要蔵 浜師四人

小役人中

一、同二十九日、志佐瀉を見分

普請奉行 庄屋 浜師 才料

木寺紋右衛門殿 市山甚助 富田治助 松野豊助 筆取直助

代官

松本茂八 吉永斧左衛門 出口要蔵 浜師四人 小役人中

一、一二月二日、御厨の大崎小嶋瀉を見分

普請奉行 庄屋 平組

木寺紋右衛門殿 松田長左衛門 出口要蔵 浜師四人

代官

日高鹿右衛門 吉永斧左衛門 松野豊助 小役人中

(21頁)

右の通り御領内の瀉地見分が終了、一二月三日、平戸へ渡海する。

一、一兩日遅れ同六日、自宅に帰る。

一、早岐大手原から、来春、手初めに工事に掛かられるので、佐々瀉は一応見合せとなる。

一二月六日、早岐大手原見分。お越の人数は左の通り。

普請奉行

山口野左衛門殿 林左次平 才料 松野豊助

代官

木寺紋右衛門殿

庄屋

豊村留平次 同 筒井勇吉 小役人中

中田万之丞殿

同

豊嶋重兵衛

折原牧右衛門

大小頭佐々

小頭

浜師三人

庄兵衛

石田与兵衛

吉永斧左衛門

松右衛門

組 岩崎貞助 太平

同川下

馬場崎右衛門

組 堀量助

小浦より 重左衛門

内々にて兩人

市左衛門

一、同十二月、平戸からお越しになり、御見分。立合の人数は左の通り。

御奉行

帳本

才料

神戸衛士右衛門殿

松尾要之助殿

筒井勇吉

当職手付

代官

長村内蔵助殿

林 左次平殿

山本兵吉

同

四人

七種笹右衛門殿

勘定役

浦目付

浜師

日高治左衛門殿

崎田民八

浜屋

早岐押役

庄屋

西村屋

原 半平殿

豊村留平次

庄兵衛

普請奉行

同 広田

防州

山口野左衛門殿

豊嶋重兵衛

太平

同 右

木寺紋右衛門殿

大小頭代

小役人中

同 右

中田万之丞殿

平組

出口要蔵

(22頁)

右の通り御見分があつたので、来春辰(一七九六)年からいよいよ工事開始と決まり、同一五日、羽口方(堤防の法面工事)は生月の石屋忠助に請負仰せ付けられる。

一、堤防の長さ六百間(約百九メートル)、銀高十貫目で石垣築立。生月の忠助請負

一、同土手、銀高八貫六百四〇目で両御普請組に仰せ付けられる。左の通り御請書

一、**■**大手原潟地の造成工事について、堤防用の土の分は私共の方から提出した見積り通りです。人夫の雇用を許可して頂き有難く存じます。見積り高は銀高八貫六百四〇目です。精神誠意工事に当たる所存です。右の請け書はかくの通りでございます。以上

卯(一七九五)年

吉永斧左衛門

一二月一五日

馬場崎右衛門

石田与兵衛

同 一六日、早岐から引き返し、同一九日直に平戸に赴き、同一日帰る。一、寛政八辰(一七九六)年正月六日から大手原まで出向く。人員は左の通り。

大 石田与兵衛

佐々

平組 出口要蔵

小 吉永斧左衛門

川下

才料中

山口野左衛門殿

大 馬場崎右衛門

同

中野忠右衛門

木寺紋右衛門殿

小 郡治右衛門

同

一、同九日、仕事始めに杭打ちをし、見積り等差し出した。順次、堤防土手の請負工事をお願いするので、色々申し伝える。

(23頁)

一、同九日夜から雪が降る。一〇日、一日久方の大雪。寒気強く諸々の木が寒さのため痛んで枯れてしまった。

一、同年四月六日、潮止め。全て請負にて潮止め工事は滞りなく進み漏水なし。

御当職手付

普請奉行出張

井樋普請で

長村内蔵助殿御越しになる。山口野左衛門殿 両組より二〇人程出る。

早岐押

大小頭

小頭

浜屋

原半平殿、石田与兵衛

吉永斧左衛門

庄兵衛下り

同

郡 治右衛門

才料中

一、御役所が塔の崎(大塔)に新しく出来、許斐衛七殿(役人 老州)と下代一人が詰めた。内蔵助殿から御役所で御酒をいただくようにと申し付けがあった。組中にも石工にも宿で備えの酒など出すよう申された。

五月二三日引き取り又出勤した。使用人夫並びに物品の使用帳面等を取り調べ、役人衆と引き合せを済ませ、六月二八日引き取った。

一、庄兵衛が引請けた御試し塩田が完成し、三田尻から浜子六人を連れてきて、六月二六日初めて塩作りをする。未(一七九七)年までに一二町出来るとの事。

右塩田は寛政二二申(一八〇〇)年に、田平の高橋伊平と早岐の福田平助

を納税責任者として、運営をお任せになられたとの事。

△二、辰八月、近藤郡太夫殿が隠居されたので御組さしあげられ、道具を武器庫にしまい納めた。森宇太夫殿の仮支配となる。

△二、同日、吉村市郎左衛門殿に組が御預けとなり、同九日お引き渡しがあり、直ちに出向き待機した。

(24頁)

△二、寛政一〇午(一七九八)年一〇月七日、吉村市郎左衛門殿に新組がお預けとなり、普請組は高橋市左衛門殿にお預けとなる。与平が忌中であると自分と連絡があった。同十日、平戸へ渡海して同一四日、組の引き渡しがあり道具を武器庫にしまい納める。

一、一月五日、道具を引入れる。

△二、享和三亥(一八〇三)年二月五日、高橋市左衛門殿に新組がお預けとなる。普請組は酒井弥右衛門殿にお預けとなり、同一二日組を引渡す。拙者と小頭有助・小頭善右衛門・小頭甚右衛門・平組勇平・勇助とで引き渡しを済ませる。新御頭宅にて土器、吸物三つと本膳が出され、夜に入って十時頃退出した。

一、文化二丑(二八〇五)年正月一日、酒井弥右衛門殿に新組がお預けとなる。普請組は同日、本沢甚兵衛殿にお預けとなり、二月八日に組の引き入りがあった。

一、文化三寅(一八〇六)年八月一四日、本沢甚兵衛殿が新組の責任者となり、

普請組の後任は成田紋左衛門殿となった。九月五日に組の引入れがあった。
 一、文化六巳(二八〇九)年五月一六日、成田紋左衛門殿は御用の都合で御先手
 同前組を預かられ、御普請組は長崎で勤務中の宗像平次左衛門殿となる。新
 任が留守中のため、鮎川庄吉殿が御仮支配となり、同年二月二五日、お引
 き渡しがあり前日に道具を引き入れた。

(25頁)

一、寛政八辰(二七九六)年二月七日、大規模な軍事演習のため、御旗本だけ
 の予行演習があった。

一、同一二月一五日、御三家の演習もあり、一番手は松浦典膳殿、士組と足
 軽が二組、与力、御長柄、御旗が所属。二番手は松浦縫殿殿、後は右に同じ。
 三番手は松浦内膳殿、後は右に同じ。

一、佐々御普請組からは組頭の吉村市郎左衛門殿・大小頭石田与兵衛・小頭大瀬
 甚右衛門・吉永斧左衛門三〇才・石田儀兵衛・真藤有助他が揃って参加した。
 兼右衛門一人だけが病気のため参加せず。佐々普請組は松浦縫殿殿の陣に
 加わった。

一、同一四日、午後二時頃御城内に次々と進み入り、仕切り御門の外に小屋構え、
 諸々の組々が小屋に入り、午前〇時頃食事を済ませる。午前二時身支度を整
 えて、具足・甲を着用する。午前四時御馬屋馬場に勢揃い、同一五日午前
 六時より繰出し、先備えから新馬場で隊を整え、午前八時に終了する。
 御家老初め御家中侍から足軽まで、御庭にて御土器を頂戴するよう仰せが

ある。午前九時頃御頭の下に参り、御酒吸物が出されたので頂いて旅宿に引
 き上げる。同一七日、小宿を引き払い、お上より頂いた一人前三分ずつの宿
 賃を払う。組中に臨時扶持米として一升ずつ受け取るよう申し渡しがある。
 陣立て模様は左の付紙の通り。

一、寛政九巳(二七九七)年一〇月頃から赤崎水門の地面の岩を、関板一枚分一
 尺ほど切り広めた。午(二七九八)年二月一七日洪水があり、仮の堤防が
 決壊する。同年四月復旧した。

一、午年二月、志方新田の中樋の見分を済ませた。

(26頁)

一、寛政一二(二八〇〇)年四月一八日、高橋市左衛門殿からお手紙が届き、麻
 上下を用意して来るようにとのことだった。一九日平戸へ参上すると、明日
 二〇日一〇時に上下を着けて来るようにと言われた。二〇日高橋市左衛門
 殿のお宅に参上すると、石田与兵衛の後任として私を御徒士組に引き上げ、
 大小頭に任命すると言い渡された。お受けするとすぐに、月番の御家老松浦
 典膳殿の所へ連れていかれた。その後、御家老方・御用人・御奉行・大目付・
 前のお頭方・勘定役など合計三三か所、大小頭任命のお礼回りを済ませた。
 次に、御頭市左衛門殿に樽肴・金百足、市郎左衛門殿と民次郎殿に樽肴、辰
 之助殿に着一折を差し上げた。すべて済んで二二日に帰宅した。

一、二八日横田直右衛門、石田形右衛門を連れて平戸へ行き、二九日直右衛門が
 私の後任の小頭に、形右衛門は普請組勤務を申し付けられた。

一、同年六月大新田の捨石を順次直していくため、団平船の使用をお願いし、だんだんと回漕する。

一、大新田の水門の橋石が傷んだので高嶋の牧場で石を切り出し、回漕のため七月十七日、団平船が出航した。

一、六月二十二日、普請組の決算のため船で平戸へ行く時、代番の許可を得るためお頭の御目見えに次の者を連れて行った。

一、弁左衛門の息子渋谷本三郎・勇平の息子吉良熊次郎・志方常蔵(卯之助の養子でその後不縁となる)計三人が願いのとおりに代番を申し付けられた。

一、同年いわし淵を一斗二升蒔ほど開墾し、赤米を植え付けた。

一、お殿様のご長男主水様が七月八日に亡くなられたので、ご城下では楽器の演奏や歌が二七日(二四日間)、土木・建築工事が一七日(七日間)差し止めとなり、田舎では一七日(七日間)と五日に言ってきた。

(27頁)

一、申(二八〇〇)年志方常平所新田井堰の板二二枚を、許可を得て取り出した。

つぎつぎと用いる。

一、同年九月いわし淵を押し廻し、杭を打った。

一、同年一〇月五日浦永喜右衛門が来て言うには、大新田外の潟に、屋敷と塩田をつくる願いが認められたという。願い書きは控帳に記録している。

一、作事講をつくろうと相談があった。一月一九日夜久蔵の家に集まり話し合った。参加したのは左の通りで、茅五〇把と羽縄二形を出し合い、それぞれ

一日加勢に行く事、出せない時はちようど二百文ずつ出すことを取り決めた。

寅谷蔵・兵蔵、亥継右衛門・要蔵・菅右衛門、申龍蔵・八之平、亥斧左衛門、酉久蔵・弥一左衛門・牧助、申里右衛門・糸蔵・次郎・逸平・

(外し) 豊蔵・重右衛門 酉善右衛門、亥庄左衛門・北右衛門
以上

(28頁)

一、小鰯淵の本堤斜面が崩れたので一〇月二三日から修復に取りかかり、河口の小石を使い積み重ね固めた。一月七日にできあがった。

一、申(二八〇〇)年一月二日、雪之が医王寺にいる、と清心寺から苦情が言ってきた。私が唐津の医王寺へ行ったところ、十一月一日から末寺心月寺の監寺かんすとなっており、私はその寺で雪之と面談した。

一、殿様が江戸・長崎へ往来なさる時、ご本陣及び道すじの立ち番として、股引・羽織を着用し普請組が勤める。行列の先払いを申し付けられた時は、半坂から山ノ田一里塚まで同様に、股引・羽織・かむり笠で出勤する。御門番を命

じられた時は、羽織袴でお勤めする。この後も、右の通りと承知すること。

一、寛政十三(二八〇二)年正月元日、御城に登りいつも通り年始のご挨拶をした。

一、同年正月二日、浦永喜右衛門の願いの件で潟の状況を見分した。立ち合ったのは、代官山口民左衛門・庄屋松田長左衛門・浜使市郎兵衛・年寄役近藤

庄左衛門・田嶋孫次郎・肝煎勇右衛門・重右衛門で願いの通り決定した。

新田の石高が御検地で増加した時、高は六斗六合となった。

一、同年七月二日中田万之丞殿が、大新田の横堤防を見分されてお渡しになった文書には、大新田の捨石は長さ百二十間、本堤防の斜面から横に一丈の石畳とし、その外に塩田の海水が通る溝を掘り通すとあった。

御検地帳写しの記録は左の通り

一、同じ横堤防の内、長さ六〇間、塩田の堤防を築造した所から南へ一〇間ほどの所まで、

市瀬免宮の前 半蔵屋敷を少し前に開墾し一斗蒔ほど付け加えた
一、田三畝一步 高六斗六合 畝町 三枚

同免中えこ
一、田二十四歩 高一斗二升三合

(29頁)

塩を保管する小屋床の設置を願いによりお許しになった。外にも文書を受け取った。庄屋にも同様の文書を渡しているとのこと。先の大小頭石田与兵衛殿からの申し送りに記録されている。

一、田一反 高一石五斗二升八合 畝町 五枚
合計 一反二十四歩 合計 高一石六斗五升一合

一、同年酉(一八〇二)年正月二十七日夜、年貢米積み出しの蔵の錠がねじ切られ、

羽須和免宮の脇
一、田一畝十一歩 高二斗七升五合 以前に開墾した宮で一枚

米一〇俵ほど盗まれたとのこと。郷中調べがあったが、さっぱり分からないそう。

(30頁)

一、田二畝二十歩 高四斗 開墾し、子(一七九二)年御検地で高を決めた。

一、二月二〇日から長浜堤防のかさ上げにとりかかった。裏羽石を使って長さ一間ほど堤防の斜面を延ばした。御普請組が延べ百五〇人、村の人夫延べ二百人で、四月一八日に完成した。

羽須和免長浜

一、田八畝七歩 高一石八斗一合 二枚

までとなった。

羽須和免
一、田七歩 高五升四合 一枚

一、酉(一八〇二)年三月一六日から半蔵屋敷の開墾に着手し、田が一斗蒔ほどできた。もとの田は三升蒔で高は三斗三合であったが、戌(一八〇二)年大

一、田 羽須和免の一斗蒔

文化六（一八〇九）年二月二日弁右衛門殿から相談を受けて、検地帳から除き、弁右衛門殿の手作りとなる。

一、田八畝二十四歩 高八斗八升

但し、畑六畝十二歩を田にして、畑の高五斗を引いた。文化四（一八〇七）年九月一〇日御検地を受けた。御奉行・帳元・手代の名前は先に記録がある。（注・六七頁）

享和元（二八〇二）年三月記録、御普請組に渡し預けられた武具は左の通り

- 一、一両御鉄砲 二〇挺 一、猩々緋御鉄砲袋 二〇
- 一、草袋 二〇 一、胴乱（弾丸入れ） 二〇
- 一、口角（火薬入れ） 二〇 一、竹火縄 二〇形
- 一、木綿火縄 二〇方 一、鑄形 二膳
- 一、鑄鍋 一つ 一、玉箱 一荷
- 一、陣弁当 一荷 一、陣山刀 一〇挺
- 但し、三〇人前・陣鍋共 一、陣苅鎌 一〇具

（31頁）

- 一、御鉄砲箱 四つ 一、櫃（大形の箱） 一つ
- 一、三つ星木綿羽織 二六 一、股引 二六
- 一、脚絆 二六 一、具足（よるい） 二五領
- 一、指物絹（旗指物） 二五人分 但し、兜・籠手・下着・上帯とも

以上

右の品々、佐々御普請組で確かにお預かり致しました。以上

年号 月 日

お頭の印

御武具担当役のお頭当て

- 一、小頭 羽織四つ 一、足軽 かんばん（主家紋入りの法被）^{はっぴ} 二〇
- 一、三尺手拭 二〇筋 一、櫃 一つ 一、手甲 二六 出来
- 合計四品 普請組に用意された右の品々は、正月三日の軍事演習の際に着用する。

酉（二八〇二）年春

一、鰯渕の荒れ地を、田として六升蒔きほど開墾した。

以前両御普請組から提出された願い書きの控えを見つけたので書き残す。

口頭でお願いすることからの覚書

一、佐々・相神浦両御普請組の人数二十五人の内、四人が小頭で、役職につかない平の者が二人です。藩の他の組々は小頭四人、弓の者五人、平の者が二人です。鉄砲は二〇挺

（32頁）

渡されています。御普請組は平の者二人です。この内一人を減らし、減らした一人分の給与で弓の者五人を採用して頂ければありがたいと思います。

減らした一人分の年間の仕事二百四〇日分は、残り二〇人が所定の仕事に加え一人が一月に一日ずつ増して勤めます。間もなく御普請組の決算・人数調整が行われます。その際、右のように一人減らし、弓組を五人増やしていただきたくよろしく願います。

明和九（一七七二）年一〇月

五人組頭中 判

小頭四人殿

右の願いの通り、藩が支給する俸給が増えるものではありません。御普請組の仕事に差し支えも起こりません。御普請組の中では、思いの外このことへの意気込みが強くなっています。何とか実現するように上申のほど願います。

大小頭

小頭四人 判

吉永斧左衛門

右願いの趣旨をよく調べましたが間違いはありません。この新しく出された願いは差し出がましいこととお思いになられると存じますが、御普請組中はこのことへの意欲が強くなっております。この願いは、特に年間決められた本来の仕事を、

（33頁）

誠心誠意勤めることは勿論、減った一人分の仕事もしっかり働くと決意してのことです。仕事の上では何の支障もございませんので、ご高察の上よろしくお話しくださいよう願います。

御頭

太田久左衛門様

一人減らす試算は左の通りです

一、切米（玄米で受け取る給与） 四石

内 三斗六升三合七勺を三%の上米として差し引く

残り 三石六斗三升六合三勺を受け取る

高にして 一一石一升九勺 〓 四〇%の受領分

一、米二石三斗一合

但し 勤務手当として、一年三百五十四日分。一日当たり六合五勺支給の米で計算して

一、米六斗

但し 一年間の勤務日数二百四十日の昼食手当。一日当たり二合五勺の米で計算して

合計二石九斗一合

高にして 八石一斗五升四合五勺 四五二五

この合計分が減る

（34頁）

一、小佐々・岳木場地区の堤防が漏水し、修復工事を命じられた。七月五日に着手、十一月一九日出来上がり引き取った。堤防の漏れ止め工事には一、御普請組が延べ六百八人、村の夫が百八〇人従事し、雇った職人の賃金と

吉永斧左衛門

諸費用の代金が合計銀一四匁五分であった。

- 一、坂口重右衛門の家族六人、内 男二人・女四人
- 一、白石忠右衛門の家族五人、内 男二人・女三人

西(一八〇二)年八月三日、内絵踏への身分の引き上げが許されたので、お受けに平戸へ連れていく。お頭が高橋市左衛門殿の時。

一、横田龍蔵と中富の継母おかち殿(この人は山本右衛門助の妹)の二人は、一月一日夜に一緒に出奔したという。私は江迎の潟見分のため居なかった。早速方々に人を遣って探したが、行方が分からないとのこと。その後、兵蔵殿と右伝次の二人を唐津に行かせたところ、山本の心月寺・雪之のところへ五日夜来たという。他所に行かないようにはしたが、二人とも帰らないと言うので、仕方なく兵蔵殿と右伝次は帰ってきた。その後、要蔵・崎太夫・重八・太七・義八・右衛門助殿方から一人、合計六人を唐津へ遣し十五日連れ帰り、おかち殿はすぐに白岩の実家が引き取った。龍蔵は、病気であると伝え、御普請組辞職を願ったところ許された。お頭が高橋市左衛門殿の時である。お頭から龍蔵はまだ若いからしつかり病気を治せばよい、外に何か事情でもあるのではないかとお尋ねがあった。これに対し、病気が治った様子もなく、内々身持ちの良くない様子もございまして、願の通り辞職が認められましたら、親の方で処置する方法もありましよう、と申し上げたので、それならばと辞職が認められ、一八日平戸から帰った。おか

ち殿は一七日病死したと連絡があった。龍造の方は普右衛門殿から松浦典膳殿に生月への遠島勤めを願い出、二六日に生月へ行った。翌西(一八〇二)年九月に再び戻って仕えることになった。

(34、1頁)

●金子善右衛門

●森 兼助

●志方卯之助 △大瀬甚右衛門

●出口要造

●出口継右衛門

●岩崎貞助 △石田儀平

●久家林助

●横田甚助 ○小印 ●鏝

●洪弁左衛門頭 □吉村市郎左衛門殿 ●小者

●●甲立 ●●若党

●山本牧助 洪谷弁左衛門

●石田兼右衛

●坂口重右衛門 △真藤有助

●坂口龍助

●松村四郎右衛門

●吉良勇平

●石井瀧右衛門

吉村市郎左衛門様御代
寛政八辰十二月十五日

馬

● 横田直右衛門 △吉永斧左衛門

● 白石忠右衛門

● 真藤勇平

大小頭

□石田与兵衛

(35頁)

一、東光寺は三年前から寺に大般若経を備えたいと、木寺紋右衛門殿・鴨川要七殿・久家竹哉殿・吉永斧左衛門・川内野善右衛門を世話人として村々からの寄進を頼み、三年に渡り準備してきた。酉(一八〇二)年六月中旬大岩和尚が上京し、一〇月末大般若経を持ち帰り、十一月二六日の御披露には、瑞雲寺初め地区の寺々の僧がおおよそ呼ばれた。

一、真藤左渡人が二月六日御普請組勤務を申し付けられた。龍蔵の後任で、お頭が高橋市左衛門殿の時。

享和二(一八〇二)年

一、江迎街道に新しい橋の建築工事を命じられ、二月八日に着手した。私は、前日土肥の伯母様が亡くなられ、喪中のため工事には行けなかった。一六日まで喪に服し一七日に出動した。

一、普請組の従事者は延べ三百三五人。

一、村の夫が百二〇人。この人たちには、一日の日当として米八合が支給された。

一、労役の義務を負う点役夫として従事した者が百三人。合計五百五十八人で完成した。

一、天満宮が九百年のお祭りに当たり、崎方天神宮・うつほ岳天神宮が二月三日から二五日まで祭礼を催し、色々趣向を凝らした出しものがあり賑わった。

一、堀口天神宮も三月二五日に右と同様のお祭りがあった。

(36頁)

一、御厨の立尾川・田構石垣の水返し建築工事を命じられた。四月一七日着手し、五月一四日に完成し帰った。去る一四日の洪水で水はねの先が少々崩れ、修理のため七月二一日に再び一組一〇人ずつ遣わし完成した。

一、工事に従事した人数は佐々・相神浦の両組で延べ千三十六人。内、六六人が小頭。

一、大新田の年貢の増税が命じられ、米百五俵を一四か村で分担して負担することになったという。

一、屋敷の上・下を開墾した古い田二枚があり、二升蒔ほどにしていた。一枚は鴨右衛門に売り渡し、残りは、はえの崎の田一枚と交換した。詳細は左に記録しておく。更に開墾し合計六升蒔ほどになった。

文化元(一八〇四)年三月新たに開墾した土地の御検地を受けて、田二畝二十歩、高・四斗となった。畑の時の高は引いた。

屋敷川の下

一、田一枚 たて八間半・横 平均して四間 坪にして三十四坪、鴨右衛門が耕作する

はえの崎

一、田一枚 たて一間半・横 道際二間半・下四間 平均して三間二合五勺坪にして三七坪三合七勺五才、斧左衛門が耕作する

右の土地の交換を六三郎に相談し、一緒に立ち会って、六三郎の測量で交換し記録した。土地の過不足はあるが、実質損得なくできた。

一、戊（一八〇二）年六月三日朝から大雨が降り大新田は一面水であふれた。堤防の見廻りに口石を通って行く途中、とん田土橋の先へ渡ることができず、口石で少し手間取った。木場川の堤防は全て水が越しており、宮山の際まで水があふれていた。赤崎から先の堤防に変わったことはなかった。甚右衛門・有助・直右衛門・勇平・重左衛門・継右衛門・用蔵・左渡八、この人数で水の様子を見回り、長屋で落ちあった。

（37頁）

一、私を初め、御普請組全員の家族を調べて人別帳をつくり、年齢・名前を付けて出すよう宗門方から言ってきた。一つ一つ調べ六月六日に書いて提出した。毎年二月五日に宗門改め方に提出する。

一、戊（一八〇二）年六月二〇日宮内殿が本家に入られた。中書は八月から平戸へ頭取として行った。

一、私の弟吉永善人が御手回りに召し出された。お頭高橋市左衛門殿へお願いし、善八も小樽・肴を差し上げに参上した。

一、八月二七日、三柱神社で御願成就の儀式が続いてあり、見物人が多かった。

一、七月御普請組の決算に平戸へ行った時、お頭高橋市左衛門殿に次のようなこ

とを申し渡された。

佐々四ヶ村から郷足輕の設置願が出されているが、佐々には普請組があることだから、組がその仕事も受け持つように、との御家老松浦典膳殿の御意向が園田和平殿から伝えられ、その旨恐れ入り御受けした。本来の普請組の仕事のほかを受け持つ加役は、確認のため書類を頂きたいと申し上げたが、それは必要ない、在職の代官が相談に行くとき伝えるということだった。私も右のことをお受けし、すぐに小頭達へ言い渡した。

一、七月二〇日木場村の百姓時蔵というものが、中里村でけしからぬことをした。平戸へ連行するよう言ってきたので、御普請組から二人派遣するようにと代官山口民左衛門殿から連絡があった。御普請組の二人、真藤勇助・出口要蔵を派遣した。

一、八月一日大洪水で大新田一面が水であふれた。榎渡瀬から上の堤防は全て水が越しており、木場川の堤防はあちこち破れ、そこから少しずつ排水されていた。そのことは勘定役の方へ伝えた。

一、八月二五日白石忠右衛門の息子量蔵・石井滝右衛門の息子源蔵・松村四郎右衛門の息子五郎治三人が、見習いのため代番を願ったので承知した。三人は小頭・甚右衛門に連れられ、私の家へ挨拶に来た。

（38頁）

代番勤務を三人に言い渡し、同（一八〇二）年二月三日お頭高橋市左衛門殿の御目見に連れて行った。三人はお頭に樽・肴を差し上げた。

一、大新田水門番の大浦弥太六は、親の代から数十年心を込めて勤めてきた。そ

れで、去年頃から代官や庄屋に内踏に引き上げるよう頼んできた。一二月二日願いが認められたので、平戸へお受けに連れて行ったとのこと。私の家にもお礼に来た。私も代官や庄屋へお礼に行った。

一、一〇月二九日夜江戸で、日高角左衛門殿を柏原次郎九郎殿が切り殺し、自害したとの知らせが届いた。次郎九郎殿の屋敷は取り上げられ、角左衛門殿の子息は、定められた期間喪に服するよう申し付けられた由。

一、石田儀兵衛は老年になり、御普請組の仕事が勤めがたくなったので辞職を願っていた。については身分を御徒士組に引き上げてほしいとの願いを一月一五日提出していたところ、一二月二〇日夜、それが認められたと知らせが来た。一二日に平戸へ連れて行き、同日申し渡しがあった。お頭が高橋市左衛門殿の時。

(39頁)

村々への御触書の写し

一、これまで踏み絵免除の身分を申し付けられた者達が、更に免除願を宗門改めに出しているが、これからはその必要はない。そのことは宗門改めの係に連絡しておく。この趣旨を色々な役職の頭、その外関係する方面へ通達しなさい。以上

一〇月

松浦典膳

勘定奉行中

一、一二月二二日石田儀兵衛の後任として、小頭役が金子善右衛門に申し付けられた。

一、同日、すぐに石田形八が御普請組勤務を申し付けられた。三人は一同で樽肴、善右衛門と形八の二人は包み物を添えてお頭高橋市左衛門殿へ差し上げた。私は右の二人を川下組のお頭岡平右衛門殿、先任の吉村市郎左衛門殿のところへ挨拶に連れて行った。

一、佐々村の百姓・市郎左衛門の息子熊次郎・庄八が牛を盗み、福井村まで逃げて行き、そこで牛を捨てて行方しれずとなった。その後親族中で探していたところ、早岐方面で探し出し連れ帰った。一二月二八日平戸へ連行するよう言ってきたとのことで、警護に出口継右衛門・真藤左渡人を派遣した。二人はすぐに牢へ入れられとのこと。亥(一八〇三)年冬に壱岐へ遠島を申し付けられたという。

(40頁)

享和三(一八〇三)年

一、二月五日高橋市左衛門殿からお手紙が届き、「昨日四日公用でお城に登ったところ、新組のお頭に任せられ、後任は酒井弥右衛門殿になった」とあった。私・斧左衛門は六日すぐに平戸へ行き、高橋市左衛門殿と酒井弥右衛門殿をお訪ねしたところ、一二日に御普請組の引継ぎをする、とお聞きして直ぐに帰って来た。

一、二月八日曾祖父の四九年忌・母上様の二五年忌を執り行った。

一、引継ぎの為平戸へ行った。十日から善右衛門・有助・勇平・勇助で、一日から斧左衛門・甚右衛門の合計六人。一二日新しいお頭・弥右衛門殿のお宅で、土器かわらけの杯で御酒を頂き、吸い物が三つ、本膳が出されて、夜遅く十時頃辞去した。

一、三柱神社やしろの社移転が江戸お屋敷の了承を得たとのことで、村の神職達へも御書付を渡しているという。これで神社の山を伐り開くことになれば、私の家への風当たりが強くなり住めなくなると考え、急に屋敷を新しく造ろうと思ひ立った。去年の冬、屋根の葺き替えを思案していたことは無駄になつてしまつたが、どちらにしても仕方がないことと考へ決めた。しかし資金の準備がなく、常平所から銀一貫目借りた。但し月一・三%の利子で、御郡代・浦新八殿、代官・山口民左衛門殿、庄屋・松田長左衛門の承認を得て、お金は光明寺新田所の納銀から受け取つた。

一、屋敷地は牧崎の久蔵の所有地を相談した。大麦二斗蒔ほどの畑と山を少し添えて、高六斗の土地を銀四百匁で、宮内殿を煩わして手に入れた。

一、家屋は角左衛門殿が持つ古家を銀三百匁ほどで譲り受け、二百匁をすぐ支払つた。家の解体から運送まで済ませたところで、一一貫文(約銀百匁に相当)で庄八に請け負わせた。

(41頁)

二月二四日に棟上げ、月末ころまでに屋根ができ、三月二七日に引越した。四月三日に講経などお願ひし、親族中、近所中、久蔵も呼んで祝いの宴を開いた。

一、唐津で雪之は心月寺かんすの監寺かんすをしており、この夏、医王寺のお世話で長徳寺において立職をしたとのこと。私は湯治の願を出し、四月一五日心月寺に行った。有助・牧助も湯治のため一緒に行った。一六日から一八日まで長徳寺に逗留し、一八日夕方医王寺へ行き一泊した。一九日武雄に行つて入湯し、二四日に帰宅した。

一、去年冬から吉田村市ノ原に新しく堤を造るよう申し付けられ、佐々・相神浦両組が造成を命じられた。戊(一八〇二)年二月一日着手し、一五日一旦退去した。亥(一八〇三)年閏正月二九日からまた取りかかる。米百六〇俵分ほど人夫を雇う。

一、子(一八〇四)年再び米百俵分の人夫を雇つて、工事をすすめた。

一、五月四日洪水のため、相浦川の川下地区で水が堤防を突き抜けた。相神浦御普請組ばかりでは手が届かないので、佐々御普請組も応援に人を遣るよう勘定役から言つてきたので派遣した。五月二六日から九月一五日まで派遣の延べ人数は・・(記入なし)

一、八月二六日小値賀新田の水門工事を申し付けられ、石井滝右衛門・山本牧助の二人を遣つた。十月一四日までに終り退去した。二人が乗つた船は佐々に着き、工事が終了し退去してきた旨をすぐに報告してきた。

一、九月五日収納小屋の建築工事をした。建蔵を三日、仁平次を二日半雇つた。一、亥年の冬、平田堤・中ノ堤の立樋が破損し交換した。職人への賃金・人夫への払い・釘の代金を初頭小助に渡した。

一、吉良勇平の二男忠次郎が谷蔵殿の御世話で、田平の井上利三郎殿の養子とな

ることが決まった。

一、一二月一九日入籍、当分、忠次郎の生活費は勇平が持つことになった。
(42頁)

文化元子(一八〇四)年

一、正月元日年始の挨拶をし、二日鉄砲の打ち初めを済ませ、お節料理を頂いた。
酒井弥右衛門殿が御頭となって初めての正月なので、御祝として麻上下の御目録をいただき、ありがたくお礼を申し上げ辞去した。

一、吉良勇平・山本牧助の二人が亥(一八〇三)年冬から内踏への引き上げ願いを出していた。二月一日許されたとのことで、二人を連れてお頭のところへお受けに行き、樽・肴を差し上げた。

一、田平の御馬廻井上又八殿は、前から兄弟仲が悪く、弟、利三郎殿を養子にすることに反対した。屋敷から出そうと話し合ったりしたが、弟は承知しなかった。利三郎の養子となった忠次郎は、そのような事情なので親の勇平方に身を寄せていた。二月四日夜、又八殿は弟三蔵殿・医師道意老・御厨の侍一人、近所の百姓二人をあつめた。偽の手紙づくり、読んでもらいに百姓を利三郎のところへやり、在宅を確かめたくえで押しかけた。外から弟三蔵と医師が鉄砲二発で打ち止め、又八殿が槍で止めを刺したとのこと。

翌日すぐに又八殿が弟利三郎の殺害を届出たところ、だんだん鉄砲で殺したと噂が広がった。兄弟二人は呼び出され、寺社奉行山鹿伊織殿から、又八殿は山鹿甚五左衛門殿が、三蔵殿は吉村市郎左衛門殿が預かって、処分を待つよう申し渡された。侍が八人ずつ、足軽も八人ずつ、小頭が二人ずつ交代

で付けられたという。

医師の道意は勘定場の中の囲いに、たいまつ・手紙持ちの百姓二人は牢に入れられた。その後兄弟二人は勘定場御門前の長屋に出来た囲いに入れられ、勘定場大部屋話から二人ずつ、御組小頭・足軽が二人ずつ交代で付けられた。その後小値賀庄屋の庭に囲いが出来、又八・三蔵はそこへ送られたが、丑(一八〇五)年六月二日、小値賀から呼び戻して牢に入れた。同月二三日に又八・道意の二人は牢の出入り口で打ち首、三蔵は六町を引き回しの上平戸・薄香越えの刑場で死刑、田平・一関でさらし首となった。二人の母は、小手田の庄屋宅で尼にされ黒島へ遠島となった。御厨の侍はいとこだとうが、壹岐へ長く遠島になった。百姓二人は許されて牢から出され、事件は右のように決着した。妻や子には何の罪もないことが言い渡された。

(43頁)

一、二月二日市の瀬・江里地区の金次郎という者が、江迎・鎮守大明神の宝剣を盗み、川通りで売りに出したということが分かった。捕縛し平戸へ連行するよう指示があり、警護に真藤勇助・石田形右衛門を派遣した。私は平戸へ出張していたので、そこで命令を承った。

一、平戸比丘尼橋が傷んだので、佐々の御普請組で取り出して修復してほしいと御郡代から言っただけだった。光明寺が持つ土地で石を切り出し、団平船に積み込んだ。

一、栗林中川原の堤防で、庄屋と石田助左衛門の耕作田がある付近から水が抜け、古田の水路へ年々流れ込んで田が荒れ、年貢の引き下げを願うべきかと

いう状態になった。そこは、川の堤防の幅が上下よりも広く見えるので、堤

防の間分を荒れた田の代地にして頂くならば、自分の費用でその工事を
するという願いを、亥(一八〇三)年石田助左衛門が出していた。子(一八

〇四)年三月に願いが許され、三月四日私・小頭真藤有助・代官久保三右衛

門殿・庄屋松田長左衛門、石田助左衛門で状況を査察した。助左衛門は、そ
の工事をこの春からすぐに着手したい様子だった。石垣の築真合を考慮し、

御普請組から二人ずつ派遣することを話し合った。助左衛門が、家に来るよ
うに言うので一緒に行き酒など飲んで帰った。

一、三月一八日この村の土地調査に来られたのは、御奉行・今浦伴助殿、御郡代・

浦新八殿、手代・雪浦崎右衛門殿そのほかで、志方方面を手分けして見分し
た。昼食の接待をしようと安左衛門宅に集まった人数は左の通り。新しく御
検地で石高を定められた者達である。

谷左衛門・菅右衛門・久蔵・小右衛門・藤助・治八・崎太夫・稲右衛門・義
之允・藤二郎・有右衛門・林左衛門・磯右衛門・六左衛門・六三郎・本助・
甚太郎・鴨右衛門・五市左衛門・熊右衛門・布次右衛門・五一兵衛・紋左衛
門・権右衛門・勘兵衛・杢左衛門・八百助・安左衛門・作平次・長左衛門・
要左衛門・半之允・惣八、合計三三人。一人前白米三合ずつ・銭五八文ずつ
出して、酒・肴・とうふ代を支払い、残り銭二百五五文を

(44頁)

味噌・醤油・薪代と宿の礼として安左衛門に与えた。

一、私の分は、田二畝二〇歩で高四斗、畑を田にしたので畑の高は引いた。(注

三六頁)

一、坂口龍助の弟文蔵が子(一八〇四)年四月一日夜出奔したことは、内々で
知らせを受けた。領内中、心当たりを探すよう命じていたが、あちこち探し
回っても行方が分からないので、八月に出奔を届け出た。

一、かねの手外の塩田の水門を造り直して欲しいと内々に頼まれ、滝右衛門が息
子を代番に出して担当し、外の者も加勢して出来上がった。

一、大瀬甚右衛門の娘が世知原・西山右内殿方との縁談を願っていたが、願
いの通り認められた。人別送り状を送付し、引き取り状を送って来たので受け
取った。

一、金子甚右衛門の娘が吉田村・迎唯平殿方との縁談が願いの通り許されたの
で、人別送り状を送付した。

一、五月一二日夜、洪水で大新田が一面水であふれた。堤防の見回りに行く。水
は榎渡瀬から上の堤防・水垣をすべて越え、築出しから赤崎まであふれてい
た。小浦の酒屋で御普請組の者が集まって飲み、帰りに私の家でまた生酒三
升を取り寄せ、合わせて焼酎二升を私・有助・直右衛門・勇助・左渡八・要
蔵・菅右衛門・久蔵 合計八人で飲んだ。

一、殿様の御側室様が江戸からお下りになり、六月六日夜こちらにお泊りになら
れた。半坂から山ノ田まで行列の御先払いに二人ずつ、御門番・立ち番もい
つも通り御普請組から派遣した。

一、若殿・肥前守様が殿様の御名代としてお下りになられ、七日にここを通り田
平にお泊りになられた。行列の御先払いに半坂から山の田まで二人ずつ、立

ち番を四人派遣した。行列の宿泊所を割り当てる川合平作殿の下役を半蔵が務め、足軽二人が私の家に寄ったので、酒・吸い物と有り合わせの

(45頁)

そうめんなどを出した。

一、八月一九日湯治の許可と通行手形をお願いし、石井善蔵とともに出発し、唐津心月寺に着き一泊、二〇日は逗留した。二一日朝六時過ぎに出発し、筑前・姪の浜に一泊した。二二日は箱崎八幡宮に参詣し、産八幡・宝満山への参詣も済ませた。午後四時過ぎに大宰府天満宮に着いて参拝し、夜市などを見物した。二三日夜明け、天神宮の御下りを拝み、朝六時頃出発した。筑後の善通寺にお参りし、川原山(高良山)を参詣した。久留米の護国神社・瀬ノ下明神に参拝し、ちりくに一泊した。二四日早朝、八幡宮に参詣し八時頃出発、佐賀大神宮に参詣し、牛津に一泊した。二五日は朝六時半頃出発し武雄に着いた。二六・七日は温泉に入る。二八日昼に武雄を出発した。牧助と貞助が来ていたが、昨日帰ったという。口石の権次郎・清助と自分たち四人で連れ立って早岐で一泊。二九日は大雨・大北風で苦勞し、中里で酒など飲み、やっと川を渡って午後四時頃帰宅した。

一、子(一八〇四)年六月二日夜、平戸ひや水・安満岳下の屋敷で、八之平殿の嫡子童平殿、日宇村・福谷勝次殿、鍛冶屋町の者一人、田助の女一人合計四人が変死した。このことで八之平殿は七月一二日武士の身分と給与をはく奪され、ご城下を追放された。

文化三寅(一八〇六)年二月平戸へ戻ることを許された

一、九月二九日角左衛門、私、半蔵合計三人は連れ立って唐津の心月寺へ向かったが、あと一里ほどの所で日が暮れてしまった。一〇月一日は逗留し二日に帰った。

一、一〇月一五日夜、市瀬村の権十郎と梅之助が喧嘩したとのことで、権十郎は死亡した。梅之助は捕縛され、一七日平戸へ連行された。警護に山本牧助・宮嶋重左衛門を派遣した。丑(一八〇五)年夏に梅之助は杵岐へ遠島となった。

(46頁) 文化二丑(一八〇五)年

一、正月元日・二日いつもの年の通り、年始を済ませて三日に帰宅した。四日私の家へ年始に御普請組の者等が来た。

一、宮嶋重左衛門は去年の冬からずっと病気で、御普請組勤めが難しく、辞職願いを出し許された。正月一四日、倅の兵助が御普請組勤務を命じられた。酒井弥右衛門殿がお頭の時である。四月頃、重左衛門を内踏み身分への引き上げをお願いしていたが、願いが認められた。私はお受けに重左衛門をお頭本沢甚兵衛殿のところへ連れて行った。

一、正月二日酒井弥右衛門殿が公用で登城したところ、新組の支配を命じられ、御普請組は本沢甚兵衛殿の支配となった。一九日甚兵衛殿は佐賀への御使者を務めることになり、お供に金子善右衛門を派遣した。二六日甚右衛門殿はこちらにお泊りになられた。

一、二月八日、御普請組の引継ぎのため七日に平戸へ行き、すぐに御普請組の決

算を済ませた。

一、三月二五日夜、壱岐で長崎流人の家に押し入り、夫婦・養子一人・下女合せて四人を刺し殺し、その後火をつけ焼き払うという事件が起きた。これについて次第にお調べが進み、お頭本沢甚兵衛殿・井上三郎左衛門殿・組目付馬淵八郎左衛門殿・使役中嶋小左衛門殿が壱岐へ六月四日出船し、七月一日にそこを退去なされた。お頭のお話を

(47頁)

お聞きすると、役方御馬廻の牧山弥六右衛門殿の嫡男が首謀者で、京都浪人二人、志方村の脇間一人の四人で殺した。弥六右衛門殿の嫡男は死亡し、京都浪人一人も死んだ。残る一人と弥六右衛門殿を逮捕して平戸へ連行し牢へ入れた。二人は卯(二八〇七)年四月壱岐で処罰を申し付けられた。弥六右衛門殿は長く小値賀に遠島となった。

一、丑(二八〇五)年春、本屋敷の神社前を開墾し、一斗蒔ほどの耕地を造る工事をした。

一、長浜堤に敷設した樋の交換を、村の人夫延べ二百人・御普請組百五〇人・職人一五人で四月二七日に成し遂げた。

一、三社大明神の御社移転はこの春から工事を始め、一〇月晦日にご遷座があり大神楽を奉納した。末社一同と御郡代・久家住兵衛殿・立石伊予殿がお越しになられた。その外、代官久保三右衛門殿・庄屋松田長左衛門・市瀬庄屋吉永儀右衛門・小佐々庄屋佐々木利助・里筆取上石田善右衛門・里筆取下坂元平蔵・市瀬筆取 浜野康助・小佐々筆取千助・里初頭義之允・口石初

頭 松野小助・古川初頭 伝右衛門・木場初頭 宋右衛門・栗林初頭 紋左衛門・野寄初頭 刀右衛門・浜使 近藤吉右衛門が列席した。

去る九月九日の御祭礼から御幸の願いが認められ、年々祭礼が大変賑やかになって来た。御遷宮のことは神官請けで、支出した金銭は銀二百二十匁。

一、古い社は残らず売り払い、丁銭八〇貫文で久蔵が買い、寅(二八〇六)年春から田に開きはじめ、一反一畝とし、文化四(二八〇七)年九月御検地を受け、年貢高が卯(二八〇七)年から三年免除となった。

一、八月三日渋谷弁左衛門の辞職願が認められた。すぐに息子の本三郎が御普請組勤務を命じられ、弁左衛門と改名し、親は儀平と改めた。お頭が本沢甚兵衛殿の時である。

(48頁)

一、同(二八〇五)年夏、重右衛門の息子久蔵・龍助の息子富蔵・貞助の養子嶺左衛門、合計三人が代番願いを出した。

一、八月八日肥前深堀の鍛冶屋・和佐衛門という者が来て、要蔵の世話で私の屋敷に住ませた。平戸の鍛冶屋・宇右衛門の弟子にする内々の相談が出来て傍に置いていたが、卯(二八〇七)年正月二五日福嶋へ行くと申し出て、そのまま直ぐに深堀に帰り戻ってこなかった。

一、唐津・心月寺の雪之が、この夏京へ上ったということで、八月五日ひそかに鍛冶屋 和佐衛門を連れて行ったけれども、未だ帰っていない。二、三

日逗留して九日に帰宅した。

一、一〇月三日森兼助へ御普請組年寄役とする決定を言い渡した。小頭の有助が同行して樽・肴を持ってきたので一緒に飲んだ。

一、十一月五日瀧右衛門の二男猪之助が内々の相談で、卯之助の養子に決まり転居することになった。瀧右衛門方に呼ばれ、卯之助の居所小佐々へ行つてくれるよう頼まれたが、自分は紋次殿に呼ばれており、私の母が代わりに行った。

一、十二月二日横田直右衛門の息子が代番願いに、小頭有助に連れられて自宅に来た。文化三寅（一八〇六）年正月二日お頭甚兵衛殿の御目見えに連れて行き、願いの通り代番を申し付けられた。

一、十二月二〇日新田栄助殿が急病で亡くなられた。すぐお悔やみに行った。

一、十二月二九日大雨風の中、朝早く平戸へ出発した。四郎右衛門と人足ともども雨風で平戸に渡れず、与三右衛門という者の家で一泊した。人足も入れ四郎右衛門と酒など取り寄せて飲み、休んだ。

（49頁）

文化三寅（一八〇六）年正月元日午前一〇時頃平戸へ行く

一、半蔵方に荷物が遅れて届いた。初盃をすませ、近くから順序よく年始回りをし、御頭様のところへ四郎右衛門と二人で行った。祝賀の御酒などをすすめられ頂いて帰る。二日鉄砲の打ち初めを差し支えなく済ませた。三日退去し、四日自宅。

一、一七日、病気で元日行けなかった者と親がかりの者を、年始回りに平戸へ連

れて行き、一九日帰る。

一、二五日菅右衛門殿が亡くなられた。

一、庄屋松田長左衛門が勘定場御支配を命じられ、代わりに後任として坂元猪右衛門が来た。馬指の善右衛門が鹿町の庄屋に登用され、後任の馬指は平蔵となり、山守には田平から喜右衛門が来た。

一、真藤勇助・森兼助が内踏への格上げ願いを出していたが、他の組々からも内踏願いが多く出されていたため、今回は叶わなかったという。内踏の願い書については、近いうち藩からの通達があると熊沢半左衛門殿から申し渡されたことを、御頭甚兵衛殿からお聞きした。

一、この春宮嶋重左衛門の娘いねが、大矢浦の町人内野市次郎の妻にという縁談が認められ、人別送り状を送付した。

一、三月四日午前八時過ぎ、江戸で火事が起きた。五日昼過ぎまで町を焼き払い、長さ三里半・横一里ほど焼いたという。藩の御屋敷も類焼して全て焼け、辛うじて土蔵が二つ残ったとのこと。三月二日飛脚が届いて詳しく伝えてきたところ、御隠居様・御殿様を初め、お子様方は本所下屋敷にお移りになった。藩士・下人達も同じく本所の町なかにある宿屋に一時避難を命じられたという。久しぶりの大火事だったとのこと。（牛町火事）

一、半蔵は江戸勤務を命じられ、二月二五日船で出発した。

（50頁）

一、二月二日坂口龍助が死亡し、三月二日まで倅の富蔵は喪に服した。

二七日御普請組が稽古のため平戸へ行くので、富蔵も連れて行った。二八日

稽古の後、富蔵は御普請組勤務を命じられ、二九日平戸を退去した。風雨が強く矢岳に泊まり四月一日帰宅した。二日自宅に小頭の有助がつきそって富蔵がお礼に来、直ぐに樽・肴で一緒に飲んだ。

一、三月一九日内々で源蔵を連れて心月寺へいった。二〇・二一日は逗留して二日に帰った。地藏菩薩の供養で賑わっていた。

一、四月一五日庄屋屋敷に来るようにと代官から回札が来た。行くと郡代久家住兵衛殿が来ておられ、外に藩士・寺社給人・町人を呼び出していた。言い聞かされた内容は、この春江戸屋敷が類焼したことで、領内の一同に御用銀が命じられたということである。私は銀一〇匁差し上げることになった。一〇月九日に納めた。

一、今年（文化三年）私は厄年に入るので、六月一日講経を宮内殿くわいに頼み、中書殿夫婦・口石のおば様・善八が集まった。要吉殿は連絡したが差し支えがあらっておいでにならず、隣の要吉・和佐右衛門がお祝いの御神酒おみきをお供えしてくれた。

一、文化二丑（一八〇五）年夏からずっと日照りで本屋敷の田の損失が大きく、去年の秋の収穫が例年の半分だった。今年（文化三年）の秋は去年より酷い状況で、二年続きの日照りで大変苦労することになった。

一、六月二〇日勘定役の方からお手紙が届き、羽須和免の堤防斜面が、水が抜け崩れているので工事をするよう命じられた。八月一五日に着手し、九月六日に工事は終わったが

（51頁）

又々元のように水が抜けて崩れ、文化四卯（一八〇七）年春五月に完成した。村人を人夫として延べ六百五〇人程、一組二百人程で働いてもらった。

一、中書の身持ちが悪く与頭くみかしらから内々に相談した処、座敷牢などを作って入れておくようにと指示を受け、納戸に急ごしらえで作った。七月二日親類中が集まりすぐ困いを見届け、坂元但馬様も来られ確認して帰られた。中書は文化四卯（一八〇七）年四月二四日夜より姿を見せない。行方が分からず、五月二三日宮内殿が「出奔届」を提出された。三柱神社の御宝劔二本、御判物入箱共に紛失している事も伝えられた。宮内殿は三月一日に出船、上京され五月一九日に帰宅された。私は従弟中書との関係から御城詰を遠慮すると伝えていたが、御了解いただいたと五月二八日に言ってきた。二九日御札に平戸へ行き、上下を着けて御頭成田紋左衛門殿の所へ行った。

中書は文化五辰（一八〇八）年七月二〇日、唐津より戻り、一月に立ち帰り届けも差出したので、島送りも何卒ご容赦下さるよう清心寺に頼んだ。

一、先祖の墓所下に、屋敷内にある古い墓四基と久蔵屋敷からの墓三基を移し、兼て思っていた念仏供養が出来た。牧崎に集まり墓の建立供養を行い、夕方小僧えいそうに回向を頼んだ。御布施百文と茶づけを出し、多くの人が集まった。

一、劔術稽古の新弟子は直助・兵助・直治・直平・要吉・半之助・京助・条次の計八人である。八人は七月一七日夜、善右衛門殿に連れられて古参の菅右衛門・斧左衛門・継右衛門・谷蔵・勇助・佐渡八の所へ酒肴を届け、古老にはそうめんを持って行かせた。

一、お願いしていた団平船が六月一六日回漕して来た。八月一日にここを出船し一四日迄、堤防前土手の築石や捨石の補充にと、内々で三柱神社下の段石を割り船で運んだ。

(52頁)

一、小浦古浜の内えごは以前、光明寺塩田工事の時に内浜の人達に相談し、水門替えをした所である。この十年程前頃か、元の通り岩伐りに水門を作ったことにより、内えごは無用の場となった。元々このえごを作る時、孫左衛門が所有していた内浜溝を使用して堤防の内側に作ったえごであり、浜主達に障害となるような場所ではない。前任の大小頭石田与平殿からの申し継ぎでも、孫次郎方からここを埋めてしまいたいと内々に相談されていたとあり、何の問題もない。そうすればやがては田畑になるだろうから、後々少しでも収穫量が増すことになると同意していたが、内浜の農民達から不服申し立てがあつたので出かけた。代官、庄屋は用事があり筆取二人、浦役人と農民が立合い見て回つたが、問題点が何か一向に分らずこの件を伝えた。今年秋の初め年貢高調べの頃に、再検討するように言つて帰つたがその後、浜使近藤吉右衛門が度々来て農民達と良く話し合い、何れも納得した。孫次郎から何の問題もなく解決したので、何卒内々に済ませてくれるようにと歎願されたので、その通りにしたが後々問題が起きない様にと念を入れて話しておいた。

一、八月一四日、本沢甚兵衛殿が公用で御城に行かれた処、新組を担当されることになり御普請組は成田紋左衛門殿が担当されることになった。同一七日

(53頁)

平戸へ行き、十八日御道具を虫干し、一九日御道具を御やぐらに納めて、二〇日に退去した。

一、九月五日御普請組の引渡しとなり、御道具は同日に運んだ。

一、一月九日有助の養子要吉・牧助の忞直治・勇助の忞直平の代番願いの件で我が家に忠左衛門が連れて来た。すぐに樽肴で酒席となった。

一、一月二二日、量蔵・源蔵・五郎治・久蔵を御目見に連れて行き、私の忞京助と一同が鯛一折りを差出し、四人は樽肴を差出した。

一、一月二六日唐津心月寺より雪之が来られ拙宅に滞在し、一二月二日に帰られた。上京後初めての事である。

一、中倉要吉殿の弟甚吉と喜作の二人について今年の春、宗門方から実子であるのかと問い合わせがあり内々に相談した結果、その通りということになった。十二月三日要吉殿に差し支えがあつたので、甚吉と喜作が一緒に平戸に行き、奉行衆三人へ百足ずつ、大平殿と茂八殿へ百足と一一匁、肴代一包宛を谷次右衛門殿一人に、見習二人に八百文ずつを御礼として差出した。その後、自分へも樽肴一包み一二匁を持って来た。

一、二月一日佐渡人が勤務交代の帰りに持ってきた文書は左の通りである。

一、殿様(清公)が先月一三日、隠居願いの件を御用番(老中)松平伊豆守様へ出されていたが、一八日に殿様の御名代として秋月山城守様が若殿様(熙公)と共に御登城された処、お願いの通り殿様は御隠居、

(54頁)

若殿様へ御家督相続となられ有難く思われている。従つて、殿様を御隠居様とお呼びするように、また配下一同へこのことを周知させるようにと言つてきた。

一二月一二日小頭・組の人達を長屋に集め、殿様(清公)御隠居の件を知らせた。一三日平戸へ行き、一四日上下を着け御祝詞を申し上げに御城へ行き、一五日に退去した。

渡された通達書の写は左の通りである。

殿様のお考え

この度家督を命じられ、有りがたく思われている。公儀のお勤めは勿論、家督相続、政務等に対処して行かれることになる。ついでには御隠居様時代の通り特別に替ることはなく職務に専念されるが、お若いので特にそのことに留意して勤めしてほしいとお考えである。そこで、配下一同へ右の趣旨を伝える様に。

御隠居様のお考え

この度お願いの通り〇〇隠居され、若殿様へ家督を許されたことを大変喜ばれ、安心されている。是迄、家臣達が誠実に一生懸命にお勤めしてきたことに大変満足され、喜んでおられるとお考えが示された。

(54
1-1)

この写しが来た。

殿様御隠居お願いの事、先日一三日に御用番(老中)松平伊豆守様へ出され

ていた。一八日に殿様御名代として秋月山城守様が呼ばれ、若殿様と共に御登城された処、お願いの通り御隠居と若殿様への御家督譲渡が認められ有りがたく思われている。この件を皆に伝え今後は殿様を御隠居様とお呼びするように、と指示された。

そこで配下の人達へ右の趣旨を周知されるように。 以上

一二月

(表書)

渡された文書の写

(55頁)

殿様へ御政務をお譲りになられたが、家臣の者は相変わらず公務に励んでほしいと思われている。これは特に殿様の年がお若いことからの御心配で、皆々も御隠居様が御心労もなく御休息なされるよう、十分に心がけて勤めるように、とお達しである。そこで、配下の人達へ右の趣旨を周知させるように。

一二月七日

成田紋左衛門殿軍事演習 正面

△小頭

- -
 -
 -
 -
- 四足懸り、又四足押出し竿になる

一、米四十四俵二斗三升三合七勺

但し佐々御普請組も右同様

(57頁)

計 米八九俵一斗四升七合四勺

一、米二俵二斗一升四合六勺 大小頭の給与

但し相神浦御普請組 大小頭切米六石 切米六石に当る四歩七厘の米高

一、米二俵二斗一升四合六勺

但し佐々御普請組 大小頭も右同様

計 米五俵一斗九合二勺

合計 米九四俵二斗五升六合六勺

右は去年(文化三年)の春江戸御屋敷が類焼した事により、両御普請組に支給される給与二百一三石に当る歩米四歩七厘、今年一年分を恐縮ですがさし上げたいと存じます。以上

文化四卯(一八〇七)年正月一日 石井又七

成田紋左衛門 御普請組

右について、折紙に書きさし上げられたと聞いている。家中初め関係者一同へさし上げた。右の上米は今年と来年の二年でとお願いしていることについて、御先手組など承知している。一日・一九日は平戸に滞在し二〇日に帰宅した。

一、三月九日、大瀬忠左衛門を公用で連れて行った処、御徒士組かちへの昇格を言

い渡された。去年の十一月に願い書を提出していた所であり、成田紋左衛

門殿が御頭の時で、御礼に廻った。御家老松浦典膳殿、松浦蔵人殿へは御

頭が連れておいでになり、瀧川弥一右衛門殿には私が連れて行き、石井又

七殿へも一緒に行った。その後、御頭に樽肴御祝儀金百疋一包を持たせて

一緒に御礼に行き、すぐに酒席となった。

一、三月二日、石井瀧右衛門が小頭を言い渡され承諾した。直に御礼を申し

上げ御頭様へ報告し、樽肴御祝儀銀二両一包を出した。

(58頁)

一、同じく三月二日、白石忠右衛門の退職願が許可され、忝の量蔵に御普請

組を言い渡された。すぐにお受けし樽肴、一口香一袋の御礼をした。右の

二人を石井又七殿の所に連れて行き、つづいて先頭本沢甚兵衛殿の所へも

共に行つて樽肴をさし上げた。すぐに私は決算の仕事を終え、二十七日に

帰宅した。

一、同二十六日、稽古を指示された。その折、御用銀上納もしているので、稽

古後には是迄のように樽肴等をさし上げなくてよい、さし上げても受け取ら

れないと聞かされた。そこで稽古が無事に終了したことの喜びとして、軽

少にお神酒の小樽に籠肴を添えた。今後は右の通りに行う。

一、同じく二六日、小頭四人に月当番を命じられ有助・直右衛門・善右衛門・

瀧右衛門でお受けした。このことで樽肴をさし上げ、二七日に帰宅した。

二八日直右衛門・瀧右衛門・量蔵が我が家にお礼の挨拶に来た。

一、四月一日、真藤勇助に御普請組年寄役を言い渡した。

一、四月七日、大瀬儀平が御普請組に命じられた。この者は忠左衛門の二男で物懸りを勤めていたが、親の後任とする願いを御頭様から御奉行衆へ相談して頂き、物懸りを外し御普請組に入れてもらった。

一、真藤有助の養子・二男要吉は願い通りになり、六月六日付で人別送り状が送って来た。松田勘六殿・貞方東八殿より送付され、引受証書を十日に出した。

一、神田宮内殿こうだくないが三月一日に出船し、上京された。一八神道の官位を受け五月一九日に帰宅された。留守中に中書が出奔した。

一、中書が出奔し、従弟の関係にあることでお役勤め他さし控えたいと郡治右衛門殿に頼んでいた処、

(59頁)

五月二七日直に御月番(御家老) 瀧川弥一右衛門殿に伝えられ、了解し許可されたと二八日に言ってきた。二九日平戸かみしもに行き、上下を着け御礼を申し上げ、三〇日に退去した。

一、殿様は四月一九日に江戸を出立され、五月四日大坂に到着された。八日大坂を出船され、御船行にて五月二日に初めて御領内にお入りになり、御帰城になられた。殿様の御帰城を祝して誰もが平戸へ行った。私は前述した中書の件からさし控えている。二五日小頭真藤有助・平組真藤勇助は御祝詞の為にと上下を着けて行った。

一、殿様は五月二六日に長崎へ御出船され、六月一日に御帰城なされたとの事。

一、私の厄晴れを祝い六月五日より、五左衛門殿(病気で来られず)、紋治殿・和五郎殿・代官三右衛門殿(来られず)・小平治殿・正蔵殿・勇五郎殿・菅右衛門殿・平五左衛門殿・治左衛門・幸左衛門・善右衛門・佐助・兵助・孫次郎・吉右衛門・庄屋猪右衛門(来られず)、筆取平蔵、同じく喜右衛門、そして宮内殿こうきやうに講経を頼み計二十人。要吉殿・文治殿は近辺で加勢してもらった。

一、六日は御普請組の人達二四人。一人は佐渡八は後、外に兵蔵・龍蔵・赤崎喜右衛門・忠左衛門・久蔵・瀧蔵・喜三治で計三一人。後から正蔵殿母親・菅右衛門殿妻・龍三母親・直右衛門妻・平五左衛門妻・善右衛門妻・久蔵妻・瀧右衛門妻の計八人。直治・栄吉・継右衛門妻おその・用蔵妻、外に三人、合計四七人。

一、七日は六左衛門殿・弁七殿・駒弥殿・隼多殿・佐伝治殿・おば殿・要人殿・猪之助殿・要吉殿・文治殿・一山殿・宮より子供二人、計一三人。総計八〇人が三日間に来客し、終了した。

(60頁)

一、殿様御入部祝の御挨拶を受けられることについての文書を写す。
一、今回、御入部を祝しての御挨拶は来る六月一五日よりお請けになられる事
一、午前八時過ぎに集合の事
一、御挨拶をお受けになられる次第は左の通り

六月一五日

一、御居間で典膳初め年寄り中が御辞儀をする

一、御役人の方々

一、御側近くでお仕えする御書き方・医師・御小納戸下役・役馬廻り以上

一、表へ

表に御出の分家の松浦様方初め、役方馬廻までが御辞儀をする

一、中小姓・御茶堂・御徒士・御坊主・踏絵御免の者は鷲の間へ並んで座り、

一同御辞儀

同一六日

一、隠居、親懸りの面々が御辞儀をする

(61頁)

御組々

一、御弓の者から与力、足輕まで正月二日の通りに御辞儀をする

同一七日

一、地方の侍達、一五日御挨拶できなかつた者達が御辞儀をする

一、中小姓御徒士は御料理の間に並び、通りがけに御覧になる

一、松浦家年寄達の家来

一、町人達、村々の格式ある町人が出る

一、御長柄の者から町同心まで、正月三日の通りに御辞儀する

同一八日

一、御対座で寺院以下末寺、出家まで御辞儀する。神主・山伏・座頭・陰陽師

一、海寺・大善院・相乗院

一、安満岳西禅寺・志自岐山田満寺

正月四日の通り

同一九日

一、村々の寺院・神主・山伏・座頭

右の通り

六月二日

(62頁)

一、六月一四日、洪水で川渡りができず午後三時頃より船を用意し出船した。

紋治殿・要七殿・竹哉殿・兵左衛門殿・喜三右衛門殿・要吉殿・宴私殿・

兵藏・私・善右衛門組五人・人足山田・鴨川・下人二人の合計十八人。夜

に入り午後八時頃平戸に着いた。

一、同一五日、元日の通りに御挨拶を申し上げ土器かわらけで御酒を頂き、午後二時頃に

御城を退出した。夕方御普請組の者全員が揃った。但し善藏とほか一名は

病気で除いている。

一、同一六日、正月二日のように御挨拶が済み、直に御頭様の所に行き一同

退去した。船で来た者たちは残った。

一、一七日正午頃平戸を出船し津吉に着いた。一八日志自岐山に参詣した。要

吉・斧左衛門・直右衛門・善右衛門・四郎右衛門・貞助・要藏・形右衛

門・覚助の計九人は午後二時頃、津吉に戻った。直に出船し、午後八時過

ぎに帰宅した。

一昨丑(二八〇五)年秋の御触れ書写後に記録しておいたもの

寺社の使用人で年貢を納める期限になつても納めず、庄屋方から何回催促されてもかれこれと言ひ訳をしてすぐには出さず、外風僧も悪く分別ないような事があると聞いている。言うまでもなく田畑を請け持ち耕作している者は脇間・人内・百姓の区別はしていないので、無責任な心得である。完済期日までに納入の手続きをせず、庄屋方から声をかけてもすぐには、

(63頁)、

応じない者たちについては、その者達を上部へ速やかに通告しなさい。もし、催促が行き届かず、或は馴れ合いのようなことがあると後から分かつた場合、代官・庄屋の手落ちとして必ず処罰する。

右の内容については田畑を持つてゐる寺社・給人達へも郡方から通達し対処すべきである。以上

九月九日

松浦典膳

勘定奉行へ

九月二二日代官殿から回覧文書で通達があつたので記録しておいた。庄屋から組の者達には私の方から伝えてほしい、と言つて来たので承知したと伝えた。組長屋に呼び出し申し聞かせた。

一、文化四卯(一八〇七)年四月八日、去年冬に白石忠右衛門と忠左衛門二人が足軽から御弓組への昇格願を出していた処、受理された。幸い平戸に行つていたのでお受けして帰ってきた。忠右衛門は病気の為、後日改めて出向くことにし、午後四時頃に帰つた。同九日、忠右衛門・儀平が我が家に直右衛門と共に来て、すぐに酒席を開いた。

一、七月二日御普請組決算のため、船で平戸に行つた。一緒に嶺左衛門・直平・要吉・直治の親がかり四人を御目見に連れて行つた。三日朝平戸に着き中の崎より上陸した。すぐに御頭成田紋左衛門殿の所に出向きお伺ひした処、御見分下さるとの事だったので宿に戻り、正午頃に右の四人を連れて行つた。

(64頁)

同五日決算書を提出し、九日に帰宅した。

一、殿様、長崎へ御公用で五日朝六時に御出船された。

一、文化四(一八〇七年)八月四日より同五日朝に大雨が降り、大新田は一面水があふれ出したので水の状況を見て廻つた。佐々川は津元・蔵の本は全て越しており、長屋上より登り水垣筋も全て堤防を越え、要七の所の床も浸かっているそうである。久しぶりの洪水であつた。

一、先達て松前東の蝦夷にロシアの大船二艘、小船はあちこちの浦々に数艘来船し幕府が対処された。若年寄と御老中・大御目付・御目付・その外に松平政千代(周宗)様・藤堂和泉守様・酒井左衛門尉様・津軽越中守様方が対応された。

一、八月一日三柱神社宮へ歌仙を寄進奉獻した。牧崎へお籠りし神酒をお供え寄進札をかけた。

一、八月吉田村の百姓卯七と言う者が昨丑(一八〇五)年藩士の家で働いていた時、蔵の仕事に出され、その時米を盗み取つて売払い逃亡した。卯七が今戻つて来ているので捕縛せよとの命令があつた。鎗右衛門・義平を吉田の庄屋

の所に遣わし、その後、形右衛門・形八の兩人が平戸へ連行した。代官は吉元茂平治殿である

一、八月一五日、藩士を初め組全員の給与・手当などを書き出し提出するようにと一六日御頭様から文書が届き、年齢・氏名・住所迄、夫々きちんと調べた。

一、御普請組の組替・給与の加増・昇進・格落ち・■、その時々々に報告するよう指示されている。この件についての文書は来ていない。左記の通り書き上げた。

成田紋左衛門組 段

住所||佐々里村

大小頭御徒土組

一、切米六石 吉永斧左衛門

六合五勺一人扶持 当年 四二才

住所||佐々里村 小頭

一、切米四石五斗 真藤有助

六合五勺一人扶持 当年 五九才

住所||佐々里村 小頭

一、切米四石 横田直右衛門

六合五勺一人扶持 当年 六四才

住所||中里村

一、切米四石 久家林助

六合五勺一人扶持 当年 四二才

住所||小佐々村

一、切米四石 石田兼右衛門

六合五勺一人扶持 当年 四三才

住所||佐々里村

一、切米四石 岩崎貞助

六合五勺一人扶持 当年 四三才

住所||佐々里村

一、切米四石 出口継右衛門

六合五勺一人扶持 当年 四二才

(65頁)

住所||佐々里村

一、切米四石 金子善右衛門

六合五勺一人扶持 当年 五五才

住所||佐々里村

小頭

一、切米四石 石井瀧右衛門

六合五勺一人扶持 当年 六二才

御鉄砲之者

住所||市瀬村

一、切米四石 吉良勇平

六合五勺一人扶持 当年 五〇才

住所||小佐々村

一、切米四石 坂口重右衛門

六合五勺一人扶持 当年 五〇才

住所||佐々里村

一、切米四石 山本牧助

六合五勺一人扶持 当年 四七才

住所||佐々里村

一、切米四石 真藤勇助

六合五勺一人扶持 当年 四六才

住所||猪調村

一、切米四石 森兼助

六合五勺一人扶持 当年 四四才

住所||佐々里村

一、切米四石 出口要蔵

六合五勺一人扶持 当年 三八才

住所||小佐々村

一、切米四石 石田形右衛門

六合五勺一人扶持 当年 三〇才

住所||小佐々村

一、切米四石 石田形八

六合五勺一人扶持 当年 三〇才

住所||佐々里村

一、切米四石 宮嶋覚助

六合五勺一人扶持 当年

住所||新田村

一、切米四石 泥谷弁左衛門

六合五勺一人扶持 当年 二七才

住所||佐々里村

一、切米四石 坂口富蔵

六合五勺一人扶持 当年 一八才

住所||小佐々村

一、切米四石 白石領蔵

六合五勺一人扶持 当年 三一才

住所||市瀬村

一、切米四石 大瀬儀平

六合五勺一人扶持 当年 三九才

住所〓日字村
一、切米四石 松村四郎右衛門
六合五勺一人扶持 当年四〇才

住所〓佐々里村
一、切米四石 真藤左伝次
六合五勺一人扶持 当年三二才
四月二日組入

住所〓小佐々村
一、切米四石 志方卯之助
六合五勺一人扶持 当年五〇才

住所〓山口村
一、切米四石 石井善蔵
六合五勺一人扶持 当年四〇才

総人数 二六人

文化四丁卯（二八〇七）年八月二〇日 提出致します。

一、吉田村市の原新堤は、享和二壬戌（一八〇七）年より文化元甲子（一八〇四）年までの三か年に合計五回堤防を築き、その後はそのままにしていた所が漏れ出した、との事で土手工事を指示されたが

（66頁）

水漏れが止り御普請組による工事は必要がなくなった。しかしその担当者名を書き出すようにと言ってきた。全員で行ったので小頭初め組の者の名前を残らずに書き出しておいた。相神浦組からも同様に言ってきた。

一、真藤勇助・森兼助が内絵踏みの願いを出していた処、八月二五日に受理されたので、右の兩人に知らせた。二六日に平戸へ行き、二七日御頭成田紋左衛門殿へ御礼に連れて行き、二八日に帰宅した。

一、榎渡瀬村田要七飯屋敷の上下境について、立合って決めてくれるように言

ってきたので、文化四卯（二八〇七）年九月四日に吉永斧左衛門・小頭横田直右衛門・金子善右衛門・平組坂口重右衛門の四人が立会った。上は榎渡瀬に以前古道があった所が境界である。それまでは古川の中倉甚吉が借りている畑の入口であった。甚吉の方も善右衛門にそのように言っていた。下は渡り道古橋の所より佐々川の方に見渡して、土手に梅の木がある所、そこは石田与平殿が大小頭の時代に、吉富瀬左衛門が内々借りていたそうである。それより下は瀬左衛門に借すようにしていると、これ又、善右衛門に言っていた。

右の要七の屋敷は一四、五年前に古川の左市と申す者が希望し、丸はねの上にくっそりと家を建て豆腐など製造していた所である。中村富次郎が家を売渡し、又その後には要七に売り渡し、これまで三人に売り渡していたことになる。堤防に関することで支障をきたした時は、どのようなことがあっても取上げるべき所である。以上の事について記録しておいた。

（67頁）

本屋敷古社地前の開墾 文化四卯（二八〇七）年九月一〇日検地 古社一同

一、田方八畝二十四歩 御高 一石代

高 八斗八升 但畑方六畝十二部 畑方引田高直

検地はすべて終了した。

免奉行裏判役 同 御代官 栗林里ノ者

大曲助左衛門殿 殿川和吉殿 吉元茂平次 初頭紋左衛門

御郡代 同 御庄屋 古川触

川上八十七殿 大山兵八郎殿 坂元伊右衛門 同 伝右衛門

手代御馬廻見習 同 筆取上 のより

古川慶作殿 橋本甚五兵衛 坂本平蔵 同 善八

同 帳元御中小姓 同下 木場

中川豊八殿 市瀬吉二郎殿 浜野吉右衛門 同 宗右衛門

同 御徒士組 里触

村木喜八殿 小崎嘉蔵殿 初頭幾之允

同 有浦桑治 同 小助

同 口石

右の税率を決める時、里の関係者が全員古川寄平所に集まり話し合った。

仕出しの宅配と米銭は久蔵に頼み、その後、川上八十七殿に銀一封、焼

鮎一連を持たせお礼に行った。大曲助左衛門殿に焼鮎一連を、代官殿に

銀一包、庄屋に着代銭二百文一包を持って行った。

一、文化四卯（一八〇七）年九月二三日、忠八の二男松田善蔵、年令二三才が真

藤佐渡八の後任で御普請組に入った。一〇月一四日より御鉄砲番を一回勤

めた後は病気で勤務していない。文化五辰（一八〇八）年正月、有助方より

縁を切ったことから、勇平・牧助が御普請組全体の事として対処を相談した

が、善蔵が口石へ行く事も一同承諾しなかった。右のことについて、所属の

御普請組から命じたことを聞き入れず、勤めもせずに退職願を出してい

たので、願いの通り了解されて組から除外し、二月二十九日に長屋に呼出し言

い渡した。小頭直右衛門、年寄勇平が来た。吉蔵に米二俵組扶持として渡し

た。

（68頁）

一、文化四卯（一八〇七）年七月二五日、代官吉元茂平次殿から聞いたところ、

吉田村百姓卯七という者が、去る文化二丑（一八〇五）年藩士の家に奉公し

ていた時、米蔵の仕事に入った折その米を売り払い、代銀を盗み取り逃

亡した。戻っていると知らせがあったので、捕縛し御組に差出すようと

指示があった。組から二人を行かせ、その後、平戸へ連行した。

一、江戸で、文化四卯（一八〇七）年八月一九日、深川八幡宮祭礼があり大勢が

参詣していた処、永代橋が落ち怪我人や溺死者が七百三六人となった。その

内訳は、

武士八六人、女性百五〇人、町人四百二四人、子供男女七六人であった。他

に、半死同様の怪我人二百一人である。引取手のない死者が一人、外に行

方不明の訴えがあるが遺体が見つからない者が百三人である。怪我人、溺

死人合計千七一人、以上は南町奉行所担当者による調査の写しで、半蔵方か

らの報告の控である。

一、熊沢半左衛門殿・安田久三郎殿・貞方立桂殿・中山善十郎殿・松崎八九郎殿

は八月二八日より九月四日の間に江戸に於いて死去しその後、森治五郎殿

も死去した。脚氣しまんと言う病気だと報告してきた。

一、文化四卯年一〇月三日夜八時頃、御母公様は御手洗いに行かれ、急に具合が悪くなられた。その後は一向に回復されず、お茶、ご飯共に喉を通らないようになり、同二四日昼頃に御逝去された。

(69頁)

文化五辰(二八〇八)年

一、正月元日例年の通り年始の御挨拶が済んだ。松浦御三家様・御年寄衆御用人・御奉行・大目付勘定役衆・御家中御出入り方々と、先任の御頭様への御年始廻りを済ませた。

二日、御普請組の者が年始御挨拶のため例年の通りに登城し御鑑の間に詰め、正午過ぎに終り退去した。御頭成田紋左衛門殿の所に出向いて御鉄砲の打初めなどを終え、三日に退去した。

一、正月一六日、殿様が軍事演習を視察されるとの指示があり、一四日に藩士全員が登城した。しかし体調不良により御覧は延期、全員退去した。

一、二月九日、再度視察されるとの命令で、二月七日藩士全員が登城したがまだ御体調が悪く、一日に延期となった。具足・甲を着けての演習と思い準備をして持ちこんだが、御体調宜しからず春に延期されたと知らされ、一同退去した。平戸行が臨時の事だったので、御普請組の宿賃は一人分三步宛、大小頭は四歩五厘が言い渡され、宿舍の木田徳右衛門に渡した。

一、殿様御参勤の為二月二三日御通行となり、佐々で休憩し中里に宿泊された。

長崎奉行へ参勤の御挨拶の後、直に西国路を御陸行され小倉より御船行となる。例の通り佐々本陣に御門番・立番を出した。

一、真藤有助方で佐渡八の跡に右伝次を養子にすることについての相談が済んだ。三月二九日平戸へ連れて行き、御頭成田紋左衛門殿へ御目見得し組入りを命ぜられた。四月五日直ちに稽古、六日平戸から帰宅した。おちさは西の久保より御暇を頂き連れて帰った。

(70頁)

一、栗林下抜け所の大新田井手の掘替え工事願いが認められ、工事に取りかかり五月二日に終わった。

一、四月二五日、武雄入湯に出発した。要吉殿と一緒に唐津に行く道順で行き、二五日に帰宅した。武雄に滞在中、須古水鏡院に一日参詣し、一日は祐徳院に参詣した。

一、赤崎外湯は、寛政二二申(二八〇〇)年浦永喜右衛門屋敷を塩田にしたいと願い出、今年の春より取りかかっていた。尤も、森田兵之助が出資者となっているが、資金不足で色々と手違いがあり、漸やく文化五辰年(二八〇八)六月二三日に潮留め工事をして少々塩田も出来、塩水を入れていたが九月一日夕、塩田の堤防が決壊した。また別に出資者がおり、文化八未(二八一)年九月二日に潮留め工事を行った。文化八未年に二反ほど塩田にし、塩水を入れて塩を焼立てた。九月末に検地があり、三反五畝、内五畝潮遊び、御高一石五斗、税率一〇%の定率年貢と決まった。

一、三柱神社内に金毘羅宮御鎮座のことが、役方の内々の話し合いで決まっ

た。村中の寄進について話し合い、世話人を久蔵・勝三郎・森助に頼んだ。口石筋の勇助・弥太六にも頼んで追々にまとまり、文化五辰年六月二六日に御鎮座となった。大元施主は嘉三次で、大神樂を奉献した。

一、おちさが立石村上重右衛門殿の仲人で、高橋左平次殿の木曾八殿との縁談を決めた処、重右衛門殿が急に江戸行きを命じられた。そこで、出立前に嫁入りさせてくれるようにとの相談により、急に八月一五日に引越させた。相手方からは九月一三日に来られた。

(71頁)

一、京助は八月八日、私の役職である大小頭役を見習う様に命じられた。御頭成田紋左衛門殿に御樽肴、御菓子料として金百疋を差上げた。

一、志方常平所の御新田堤防^{かさ}上げ工事の願いが済み、六月より工事を開始した。

一、八月一七日期、長崎より午前一〇時に来た報せによると、イギリスと言う船が来てすぐに出船した。この事件により、佐賀藩主は百日間の御謹慎。

一、八月四日、石井善蔵に御普請方の頭領を命じられた。

一、八月二九日、御頭成田紋左衛門殿と奥様、泥谷^{やそはち}八十八殿と下女二人家来一人上下合わせて六人で来られ、晦日まで滞在を延期された。九月一日お帰りとになり、船でお送りした。北風嵐となり、大屋浦の岡本市郎兵衛方に御一泊された。翌一日早朝に出船し午前八時過に中の崎に到着し、直に虫干しなど手

伝いをして五日に帰宅した。

一、一〇月一三日京助は形人を伴って祐徳院に参詣し、一五日に帰宅した。願成就の御礼かたがた参詣させた。

先達で、長崎港へ外国船が来航し、長崎で牛、羊や水、薪などをだまして接收した。更に上陸の上、畑物などを強引に奪い取って行ったとの話も聞いた。同様の賊船が老岐・小値賀、そのほか平戸の島々に万一漂着し、人家を襲つたり畑物などを強奪し、また乱暴放火をしたり、その外に理不尽なことがあつた場合は、その武士は勿論、近隣の百姓、漁民に至るまで全員が出て、棒や木刀などをもって立ち向かい、なるだけ生け捕る様にする。もし又、向こうから鉄砲やその外の飛道具などを使った場合は、

(72頁)

各自が所持している猟銃をうまく使って防御し、捕えよ。彼らに略奪、乱暴されるようなことがあつては永く日本の恥辱となる。兼がね外国船への対処については幕府より厳しく言われている事であり、右のような理不尽な仕業をそのままにしているは、世間体も悪く申し訳がない。浦や里の者へも以上の事を良く理解し、精いっぱい立ち向かう様に、と周知せよ。全てこちらから先に手を出すわけではなく、相手側に理不尽な行為があつた場合、直ちに反撃し捕縛せよ。そうすれば必ず御褒美があるはずである。以上のことについての連絡等は日頃から話し合い、合図を決めておかなければならない。右の様な急変時は竹、ほら貝などを持って全員集合し、直

ちに取かかる。その際、その担当役人の指揮を日頃から習熟しておくように。老岐や小値賀は隔遠の地であり、こちらへ報告し指図を請けるようでは、急場の場合は全く間に合わない。遅れるような事があつてはならないため、日ごろから情報を共有し末端に至るまで全員、右の通り一致団結せよと、周知するように。

九月 月番

勘定奉行中

(73頁)

外国船への対処方法

一、外国船が佐々の入り口へ来た場合は、小佐々地区足毛馬の辻に火立する事

但し相神浦からの受け火も同所で同様に行く

一、鷺尾嶽への受け火は、市瀬村より火立てをする事

但し田平、江迎よりの請け火、同所へ猪調村より火立てする事

一、柘植の尾首へ請け火、小佐々村より火立てをする事

但、海上嶋内へ異船が来た時、ならびに田平、江迎の請け火は、右同所へ

鹿町懸り瀬戸の木場より火立てする事

一、右請け火、鹿町地区清水山の辻へ火立てすること

一、右請け火、長坂地区白岳の辻へ火立てすること

一、九艘泊へ異船が来た時は、小佐々懸り大野の辻へ火立する事

但右の時、請火は柘植の尾首、足毛馬の辻へ火立てをする

一、雨天で火立てが難しい時は、右の場所々々で鉄砲を三発ずつ打つ事

一、長坂、猪調の両村、多くの人が集まる所 寿福寺下の高札場
一、鹿町村も右に同じ。下の口が報告時は、歌ヶ浦津元蔵、上の口より右同様の時、鹿町庄屋

(74頁)

一、佐々里村は右同様の時、御普請組長屋より津元蔵の辺り

一、吉田村は右同様の時、中原

一、市瀬村は右同様の時、庄屋前小札場

一、小佐々村は同様の時、庄屋前小札場

一、異国船を発見した時は、右の通り火の手を合わせ知らせる事

一、火の手を見た場合、早鐘を撞き太鼓を打ち、螺・竹・貝などを吹き、村々の人々が集る所へ駆けつけ知らせる事

一、各自が心得ている必要な道具を持出すこと

文化五辰（一八〇八）年一〇月 佐々

江迎

配布の文書をもって回覧する。外国船がもし領内へ漂着した時の対処について、今回はこの文書を以って通達された。写し一通、並びに地域での対処についての文書を添付したので、心得ること。

この件について、よくよく留意する事。 以上

一〇月五日 吉元茂平次

御一同様

(75頁)

右の文書、小筆取が持ち廻ったので書き写した。

一、赤木利兵衛が、海士見崎あまみざき一本松の下、水返しの内うちに願ねがいを出してだした屋敷替
え工事が完成し移転した。潟地も後で畑にすると願を出している。
文化七年(一八一〇)年に、はねたけ堤防より畑地に開墾しその年の秋、納
税調査時に検地があり、八年は納税免除となった。

御奉行	中原丹右衛門殿
御郡代	川上八十七殿
帳元	村上彦七殿
手代	鴨川和五郎殿
同	牧山勝蔵殿
御代官	吉元茂平次殿
御庄屋	大浦宗助
大小頭	吉永斧左衛門
古川触初頭	伝右衛門

一、一二月二九日強風、私は人足を連れて平戸へ行つたが江迎からの荷物が遅
れ、善蔵を日の浦へ残留させていたが渡られず、荷物が漸く元日に来た。そ
のため平戸へは年暮に行けず、代理として京助を行かせた。

文化六己巳つちのとみ(一八〇九)年

一、正月元日荷物が届かないため、年始御挨拶の登城をしなかった。遅れて午後
二時頃、善蔵が苦勞しながら平戸に到着した。御普請組の者も日の浦泊りと
なり、平戸には一人も行けなかった。
一、二日御頭様へ御年始に行き、その後段々と御普請組の者達も渡海し、午前一
〇時頃お城に着いた。例の通り御鐘の間に詰め、正午過ぎ退出した。御頭様
の所へ行き、御鉄砲の打初めも済み、例の通りに御酒と御せち料理を勧めら
れ、午後四時頃退去した。

(76頁)

一、今年から両御普請組より足軽九人と小頭一人を江戸本所屋敷詰めにする旨
の命令があつたと言ひ渡された。書付は左の通り。

御書付の写し

御普請組は佐々、相神浦新田の普請を受け持っているが、近年に至つて破
損する場所も少なくなつて久しいと聞いている。そのため、これからは、非
常事態が起きた時の役目として、大筒を担当させてはどうかというお考え
があり、来春から佐々・相神浦の二組の内より足軽九人、小頭一人を江戸本
所屋敷の勤務に差し向けて、一年交代に砲術訓練をする様にと命令があつ
た。それにつき、その趣旨を理解して部下へ通達しなければならぬ。もつ
とも、江戸へ来る時期については、来春登る御手先組足軽と一緒に船で出
発する様に取り計らうべし、とのこと 以上。

辰の一二月二八日、月番より成田紋左衛門殿・鮎川庄吉殿へ。

一、巳年、正月二一日。御普請組の仕事初めに付き、佐々御普請組から出す江戸本庄詰の人員は、小頭の金子善右衛門・森兼助・松村四郎左衛門・坂口富蔵・真藤右伝次の五人を選任し伺いを立てたところ、すぐに仰せつけられた。

(76頁・1)

御書付写

御普請組は、佐々、相神浦新田の普請を受け持っているが、近年に至って破損する場所も少なくなつたと聞いている。そのためこれからは、非常事態が起きた時にすぐに対応する役目を受け持たせてはどうか、という殿様の御意向があり、来春から佐々・相神浦二組の内より足軽九人、小頭一人を江戸本所に差し向けて訓練をし、一年交代にする様にと命令があつた。それにつき、その趣旨を理解して部下へ通達しなければならない。もつとも、江戸へ来る時期については、来春登る御先手組足軽と一緒に、船で出発する様に取り計らわなければならない。以上

辰の一二月二八日、月番より成田紋左衛門殿、鮎川庄吉殿へ。

(77頁)

一、江戸勤務の者達は巳年正月二九日に自宅を出発し、二月三日に平戸を出船、田助を経由し、三月二日に江戸に到着したとのこと。江戸では鉄砲の稽古を仰せつけられたそうで、小頭も同様に稽古する様にとの命令が来た。六月一

三日の書状に、鉄砲だけでなく大砲も一五匁(約56g)から三十匁(約112g)まで稽古しているとあつた。また六月七日の稽古中に、煙硝箱(火薬を入れておく箱)に火が飛び込んで、四郎右衛門・右伝次の二人が火傷したと知らせが来た。

鉄砲の指導者は、旗本八百石取の谷庄右衛門様と、その嫡子の谷邦三郎様、相神浦組からの人員は松村六之平・青井三左衛門・馬場林蔵・吉井銀左衛門・吉井伊平次。

文化七(一八一〇)年八月二一日、右の五人は江戸を出立し、九月一六日に平戸へ到着、一八日に自宅へ戻つた。鉄砲の稽古に精を出したので、中目録の砲術免状などを拝領して江戸から帰つて来た。相神浦組の五人も全員拝領した。もつとも四郎右衛門は、七月は火傷で稽古ができず、免状を辞退したという。四郎右衛門は病氣、善右衛門は九月末頃より病氣になり、年内の出勤は無かつた。

一、春、夏、秋に懸けて大旱魃があり、被害が甚大であつた。本屋敷などは、ようやく米一〇俵ほどの収穫であつた。五月三日、大川が渡れなくなる位の大雨が降つた後、五月一八日に少々雨が降り芋などを植え付けたが、その後ひでりが始まり、七月二九日に久しぶりに雨が降つた。

一、石田平太郎が新酒屋の願いを去年八月に出していたところ、今年の八月八日願いの通り許可が出て、八月中旬頃より酒を販売し始めた。売り場にしては屋敷が手狭になり、赤木利兵衛の本屋敷、廣川宴私殿の古屋敷に転居し

た。午年の新酒から手作りしている。もつとも、新酒屋は、郷中四ヶ村の願いであった。

一、文化七年（一八一〇）年の五月十六日、成田紋左衛門殿が藩の用命によって御先手同前組御預かりになったとの知らせが来たので、同一八日に平戸へ行った。

（77頁〜1）

御普請足軽 九人

同小頭 一人

五月初旬に平戸を出船、六月の初めに江戸に到着。

右本所詰め御普請組の足軽交代の時期については、先達で通達しておいたが、江戸での鉄砲稽古は専ら夏に行うものなので、前の通達の通りでは稽古に差し支える旨の報告があった。そのため、この度再度右の通り決定したので、よく理解して以後は間違いの無い様に取計らうように。

巳年一二月、月番より御普請組中へ。

（78頁）

鮎川庄吉殿が、川下組御頭仮支配に任命された。

一、宗像平次左衛門殿が長崎で御普請組の支配を御預かりになり、一二月二〇日に長崎から戻られた。仮支配となられたばかりの鮎川庄吉殿が同日に亡くなられ、新組頭の守山文平殿が川下組を引継がれた。この日は有助の詰日だった。同二六日から直右衛門が詰めた。

御書付の写しが御頭様へ届いた

一、御普請組の江戸詰交代について、前の命令の通りでは鉄砲の稽古は夏が例であり時期がずれてしまう。これからは五月初旬に平戸を出船し、六月中旬に江戸へ到着するように予定せよとお達しがあったようである。御月番様から両組の御頭様へお話があり、江戸に出る時には、その心づもりでやるようにと、仰せつけられた。

文化六巳（一八〇九）年一二月に指示があったので、書留めておく。

（79頁）

文化七年（一八一〇）年

一、岩崎定助は病気のため長旅が出来ないので退職願いを出した所、正月二日に許され、二月五日に内踏みへの昇格と退職が願いの通り申しつけられた。養子の峯左衛門は同じ日に、本組入りと江戸詰めを養父の跡継ぎとして仰せ付けられた。

一、今年の江戸勤務の交代人員をくじ引きで決めた。山本牧助・出口喜三次・渋谷弁左衛門・白石領蔵・岩崎嶺左衛門の五人、小頭は相神浦組から馬場郡之允。四月二八日自宅を出立、五月四日平戸を出船し、六月一九日江戸に到着したとのこと。

一、三月二五日、平田逸作殿がやって来た。大新田の土肥に櫛はせを植え付けるように、と先ごろ御勘定役衆と御郡代衆から命令が出ており、この度植え付

けのために来られ、庄屋と私が立ち会って、三月二六日より植え付けを始めた。

一、私は去年の九月、組中の者達が不平不満を言ってきたので、今年の二月二〇日に善次兵衛に頼んで御暇願いを差し出して置いた。同僚達とも相談をするので、一旦預かっておくとの事で願書を受け取られた。後日、それについて通達があるとの事だったので、四月一七日に出向いたところ、まだ高齢という訳でもなく、病気という訳でもなく、代々これまで大小頭を勤めてきた家でもあり、非難を受けた自分では勤め難いと言うだけでは、御暇願いを受理し難い。取りあえず勤めを続けるようにと仰せつけられ、有り難くそれを請けた。

(80頁)

願書もお返しされたので受け取った。四月二二日、稽古を仰せつけられた折に、その旨を小頭はじめ組中に通達した。

一、五月二日御頭宗像平次左衛門殿より書状が来て、自分はじめ小頭と組中の人を書上げる様にとの通達があった。同三日平戸へ出勤した所、書上げには何年号、何月何日に登用されて、何年何月何日に転役を仰せ付けられたかを、一々順を追って■■■■■するように仰せつけられた。小頭と平組も、同様に書き出すよう、右の控えの別紙■■■■■とところ、組の内の者で内踏みを許されている者が居れば、■■■■■書き付ける様に、諸作物の作柄も年数にて書き出すように仰せ付けられたので、委細を書き出して■■■■■、同

五月二六日、再度平戸に行つて書付を差し出した。(■■■■■ 解説不能)

一、六月七日、洪水でかいら川の土肥が決壊し、口石免と小浦免の総ての工夫で塞ぎ止めた。八月から普請に取り掛かって土肥を作り直し、村人も普請に駆り出した。

一、御頭宗像平次左衛門殿が、八月二二日に藩命によつて長崎聞役を辞任され、大目付に任命されたと通達が有つたので、九月四日御祝辞に行き、樽と肴を差し上げた。

一、佐々・相神浦両御普請組をこれからは大筒組にすると、先達で御隠居様(松浦静山)より内蔵助殿へ指示があつた旨、内密に通達するように仰せつけられた。委細は追つて指示がある。

一、九月八日かいら川の土肥損傷個所の御検分があり、その時大新田土肥通の赤木利兵衛の新田も検地があると、昨夜御代官殿から通達があり立ち会つた。

一、かいら川の五左衛門殿の耕地では年貢を七年免じ、伝蔵の年貢は五年、平助の年貢は三年免じられた。

(81頁)

少々堤防破損し、不作によりこのあたり今年は満足な課税ができなかった。

同日

一、赤木利兵衛新田検地、二反四畝、内六畝が潮遊びの場所、残り一反八畝(四〇間、一八間)は八年間年貢を免除する。あとで水田にした時に、再度見分されて、水溢れ等手入の次第によつて、年貢御免の年数も決定すると言う事

だ。御立合の人数は前に記載してある。

一、九月二五日、平戸へ出向いた所、二六日川下組御頭・志佐岡右衛門殿御宅において両組大小頭、小頭一同に江戸より御隠居様から出された御書を読み聞かせられた。これからは大砲稽古について、しっかりと話し合うよう、との仰せ付けだった。同二七日川下組の久田伊平次がやって来たので、武衛流大筒の見学のため、御台子だいしに出掛けた。

一、真藤有助・石井瀧右衛門の兩人とも年を取ったので、小頭を勤め難くなり、御暇願いを出しておいた。有助は数年間小頭役を務めていたので、御徒士組昇格の願いを差出しておいたところ、一〇月七日通達が届いた。真藤有助・石井瀧右衛門・真藤勇助・大瀬儀平・石井源蔵・真藤要吉を同八日に平戸へ連れて行った。八人の辞令お請けは明日の朝連れてくるように仰せ付けられた。もつとも瀧右衛門は上下の着用には及ばないとの事だったが、病気で参上できなかった。同九日、全員を連れて御頭の所に行った。

有助は数十年の精勤を賞して御徒士組を仰せ付けられ、瀧右衛門も御暇願いの通り許された。支配役は横田直右衛門に、真藤勇助・大瀬儀平の兩人は共に小頭を仰せ付けられた。源蔵・要吉・長左衛門は直ぐに本組となり、有助は御月番の御家老山鹿伊織様へ御礼に参り、午後二時頃より右五人を御礼に召し連れて出かけた。御樽肴酒一斗、塩鯛一折、するめ二斤、肴代の青銅一貫文を持参した。

(82頁)

有助・勇助・儀平は一人金百疋ずつを御祝儀として差上げた。源蔵・長左衛

門は一口香を二袋ずつ添え、岡右衛門様には御礼に連れて行った。同一日佐々に引取る。一日には、右の礼として私の家に有助達が訪ねて来た。殿様(松浦熙)は、一〇月二三日に江戸へご出発。中里にお泊りになって、長崎御勤めを経て小倉より乗船、室津で上がり再度陸路で行かれたとの事。高力慶介殿の御供に二男の久吉を行かせた。一二月七日、江戸に到着された。

一、大砲稽古を見分するとの通達があったので、江戸から帰って来た者達を連れて、一〇月晦日に平戸に行った。善右衛門・兼助・四郎右衛門は病気で行かず、留蔵と右伝次、川下組の者で江戸帰りの五人も共に行った。一月朔日、岡右衛門様が御出になり、稽古銃薬などの見積りを申し付けられた。同二日に通達があると言う事だったが、受け渡しが出来なかったため、三日まで留まった。

同四日

一、鉛三貫百四〇匁
一、大筒百目銃 一挺
一、塩硝一貫百目
一、同三〇匁銃 一挺 渡す
相渡両組にて
一、同一〇匁玉 三丁

一、鑄形 三膳
一、鑄なべ 一つ
一、込矢 二本

右の通り仮手形にて

同五日 天気よし

一、追廻し馬場にて、百目と三〇匁、一〇匁の大筒を、一人五発ずつ打たせた。滞りなく済み、同六日引取る。

一、一月二〇日、勇助が小頭になった御祝いがあった。

一、一月二二日、祐徳院に参詣。内密に形八・辰治と同道し、嬉野に泊まる。

一、一月二二日、武雄に泊まる。黒髪山に参詣し、同一四日少々暮になってから帰宅した。

(83頁)

一、十一月二六日に船で平戸へ行き、矢場を拵えて、一七日に帰宅。

一、二二日に有助・長左衛門の御暇願いが受理されたお祝と、二三日には儀平の小頭になったお祝があった。

一、二月二日に平戸へ行った。同三日の早朝、御頭様の屋敷へ出仕したところ、先達で通達があった大筒稽古は、一ヶ月に一人が一〇発ずつ打つようにし、銃薬と諸々の備品ともに見積もりを出す様に申し付けられた。則ち別紙の通り書付けを差出して置いた。

大筒稽古銃薬積り書

一、塩硝二貫六〇目 但二〇人にて一人が一ヶ月に一〇発ずつ打つことにして
内五発が一〇匁筒、四発が三〇目筒、一発が百目筒を打つ積り

一二ヶ月分

塩硝二四貫七百二〇目 但 百目筒 一五匁薬

三〇目筒一二匁薬

一〇匁筒 八匁薬にして

一、鉛六貫四百八〇目 但、右同じく、一〇匁銃五つ、三〇匁銃四つ
百目銃一つして一〇を鑄て二割引の積りにして
一ヶ月分

一、塩硝四九貫四百四〇目 但、両組にて四〇人、一二ヶ月分

一、鉛一二貫九百六〇目 但、右同じく 一ヶ月分

右の通り両御普請組の大筒稽古に必要な鉛、塩硝を見積りました。

以上、 午一二月三日

大筒稽古入用品の見積り

(84頁)

一、中火繩 十方 但、二〇人で一ヶ月に一度、一人前半形宛の積り

一二ヶ月分々二百二〇方

一、角板八寸方二〇枚 但、二〇人で一人前一度、一枚宛の積り

一二ヶ月分々二百四〇枚

一、半紙 百枚 但、右角張り入用、角一枚五枚張りにして

一二ヶ月分々千二百枚 六束

一、同 二百枚 但、御鉄砲拭き入用、一人前一〇枚宛にして二〇人分

一二ヶ月分々二千四百枚 一二束

一、胡麻油一合

一二ヶ月分々一升二合

一、とのこ 一、ごふん

一、のり 一、すみ一斗ほど

一、薄縁二枚 但、二間積り

一、宿賃 但し、人数日数の次第は、その時々々に報告します

右の通り大筒稽古に必要な品々、一組の一度分を荒積りしました、以上

午二月

伺い奉る覚

両御普請組は、此度大筒の稽古を専らする様に仰せ付けられました。大筒を取り扱う事は、

(85頁)

御普請所勤めと同様に重要な任務なので、その時と同じ様に昼食代を出して下さる様に、宜敷くご検討ください、以上

午二月

右の見積り書の通り二月二日に決定したと、同晦日暮れの挨拶に出かけた時に申し渡された。もともと、銃薬、ほか様々な品は共に御武具方から請取りに行くように。昼食代、宿賃は御勘定御判請手形にて受け取る。薄縁は傷んだ時に新しい物に引替えて受け取る様にとの事。

一、志方卯之助、石井善蔵の兩人共に、内踏み願いを差出して置いたところ、

一二月一〇日手紙が届き、兩人共上下を用意して連れて来るように通達が来た。一二日、一同船で出船したが寒に入ったので風が悪く、大屋浦に泊り一三日の朝着いた。一四日用が済んで、稽古を申し付けられた旨を佐々に連絡した。一七日一〇匁筒にて稽古を終え、一八日に佐々へ戻り、夜になって

帰宅した。一九日に兩人共拙宅に礼に来た。長屋にて祝いなどが有り出席し

た。暮に及ぶまで食事をして京助も来た。

一、十二月晦日に平戸へ渡海し、御頭宗像平次左衛門殿の所へ暮れの挨拶に行つた。

文化八辛未(二八二)年

一、正月元日の午前一〇時頃に登城し、年始の挨拶を済ませ、御年寄衆へ御年始廻りをした。御役人方へも挨拶が済んだ。

(85-1頁)

高にして 六石九斗七升二合七勺

合せて 一七石九斗八升三合六勺

内一五石

但し御弓五人を雇うための給与は、一人分が高三石ずつにして一五石、残る分は組費用にするようお取り計らい下さい。以上

(86頁)

同二日天気よし、御組中礼式のため御鑓ノ間に詰めた。それを済ませて、御頭様に年始の挨拶、鉄砲の初稽古も終り、御節をこ馳走になった。

正月一五日に平戸へ渡り、同一六日に大筒の稽古をした。五、六人ずつ五日の内に四日は薬■、同一日は玉込め、正月二九日まで三交代で行われた。私は二七日に佐々へ引取った。正月二五日に御年寄衆が、江戸下りの者の大筒の腕前を御見

分なさるといふ旨の申し付けがあつて、西口御屋敷の矢場にて御見分があつた。

御家老	松浦藏人殿	御普請組頭	大小頭佐々
	長村内蔵助殿	佐々	吉永斧左衛門
	山鹿伊織殿	宗像平次左衛門殿	同 川下
	豊田隼人助殿	川下	岩崎善次兵衛
	志佐岡右衛門	小頭 佐々	横田直右衛門
		同 川下	高増平左衛門
			坂口富蔵
一〇文目二	三〇目二	四発ずつ	佐々 森兼助
百目	二 三〇目二	四発ずつ	同 坂口富蔵
百目	二 三〇目二	四発ずつ	同 真藤右伝次
一〇奴	二 三〇目二	四発ずつ	同 松村六之平
百目	二 三〇目二	四発ずつ	同 久田伊平次
三〇目	二 二百目	二 四発ずつ	同 吉居銀左衛門
百目	二 三〇目二	四発ずつ	同 青井三左衛門
三〇目二	二百目	二 四発ずつ	同 馬場林蔵
	しめて	八人	
	病氣にて参らず	佐々	金子善右衛門
			松村四郎右衛門

(87頁)

滞りなく御見分が済んだ。随分よろしかった、とのお言葉を頂いた。より一層心

懸けて稽古に精を出す様に申しつけられた。

一、昨二三日、御矢場の拝見に出かけた。御役人石田元助殿の案内で、斧左衛門・善次兵衛・六之平・兼亮・銀佐衛門が出た。

一、二月、閏二月、三月、四月の四ヶ月間の大筒稽古は、一ヶ月に五日ずつ出勤した。

一、六月朔日平戸に行き、二日より五月分六月分と二ヶ月分の稽古が十一日に終わった。

一、鎌辺田新田の山下崩れ岩のあたり、浜辺通りの道筋には支障が無い様に開発したいと、石田形八が内々に願いを出したので立合つた。

未二月八日

代官 吉元茂平次 庄屋 大浦宗助 初頭 伝右衛門

吉永斧左衛門 小頭 横田直右衛門 石田兼右衛門 石田形八

全部で右の人数が立合い、先ずは内々にて開発する様にと相談した。追つて田畑にでも出来れば、検地をお願いして相応の課税を請けるだろう。

一、閏二月朔日、古川右衛門兵衛殿の家の者、使用人を含む五人が武雄へ入湯に行き、ここに宿泊された。前もつて御頭平次左衛門殿より御状が来た。

(88頁)

一、二月二六日、善次平殿家内の御世話で金子善右衛門の養子となつた茂八がお頭様にお目見えをし、すぐに養父の役職を受け継いだ。もつとも右願いは組

年寄と小頭中より願いを出したものである。

築出本渡瀬土肥の下手を永石七右衛門が屋敷にしたいと願いを出したので、代官吉元茂平次殿、御郡代川上八十七殿へお伺いをたてたところ、近辺に差支えが無いのならば、仮屋敷として渡すのも当然だろうとの事だったので、未二月二六日に吉永斧左衛門・庄屋大浦宗助・横田直右衛門・出口継右衛門・栗林初頭紋左衛門・七右衛門・小川義平が立ち合つて許可した。以後土肥を粗末にする事があれば、何時でも取り上げるといふ念書を書いておいた。

一、五月朔日、江戸勤務予定の者、小頭真藤勇助・石田兼右衛門・出口継右衛門・吉良要八・真藤長左衛門が江戸へ出発するために、相神浦組の五人とともに佐々の宿に集まっていた。未だに乗船も出来ないとの事で、三日には皆一旦引き上げた。私も組の用で平戸へ出たが組の用が終わらなかつたので、四日に帰った。勇助・長左衛門と二人いっしょだったが洪水で川を渡る事が出来ず、文治殿の所に泊った。江戸詰の者達は再度五月一三日に出発し、二六日に出船したそうだ。勇助・兼右衛門は御献上の役目を申し付けられた。兼右衛門は旅の途中、宮宿で病気になつたため旅程をのぼし、要八が付添つていくとの知らせが来た。三日程おくれ江戸表に到着したと追つて知らせがあつた。

一、五月八日に田植えをした。例年の通り組中の者が加勢した。午前一〇時頃、一時頃川下より使いがあり、妹が夜明け方死去したと知らせして来た。すぐ

に川下へ向かつたが、洪水で川を渡る事が出来ず、半之助が代わりに出かけた。新田に行き一泊し、翌九日に墓寺に参つて帰つて来た。

(89頁)

一、大筒稽古の時期を中倉平助の所へ知らせた。平助がやって来て、稽古に精を出すようにと仰せ付けられたことについて話し合つた。六月四日より出勤した。平助は御先手組の足軽だったが、先達で御先手組の支配から外れて御武具方に所属し、御徒士組を仰せ付けられたということだ。

一、御儉約に付、大筒稽古は一年間に三度にするようにと、仰せ渡された。七月から二度、今年までは臨時稽古の玉薬が支給されるが、来年からは臨時の玉薬は支給されない。

一、未八月六日開墾地の内見が行われた。赤崎塩浜も同様なので、いわし洲の新田開発願いの場所も頼んだところ、代官吉元茂平次殿・庄屋大浦宗助・筆取石井祐左衛門・初頭幾之允・吉永斧左衛門が立合つて内見をされた。この件は開拓の完成のあと、検地も願ひ出るべきとの事だったので、今年は見合せることになり書留めて置く。

一、赤崎喜右衛門塩浜新田は、九月に検地が済んだと言う事だ。

一、浜三反五畝、内五畝は潮遊び、引いた残り三反の浜高一石五斗代の一ツ成(一割)を通常の年貢にする事が決まつた。一三年間は年貢が免除されることだ。御奉行松尾要之助殿と御郡代大桑宇平太殿が御立合ひになつた。

一、九月二五日、磯本市六殿・浦慶治殿・紫加田加吉殿・多々良与兵殿の四人連

れで早岐の帰り一泊し、翌二六日に帰った。

- 一、一月二五日夜、平戸の魚店から出火した。午前〇時頃に連絡が入った。稽古で平戸に居合わせ、すぐに現場に向かった。鏡川松本懸り持ちより焼け出し、小川庵門脇まで焼払い、本町通り比丘尼橋までどちらも共に川まで残らず焼払われた。もつとも牢屋は残り、本家八七軒が焼けたということだ。

(90頁)

- 一、一月一三日、軍事訓練を午後四時頃に終えて、翌一四日に全員帰り、私と右伝次は残った。

- 一、同一五日、瀧右衛門の三男初次郎について、吉田村大蔵院への養子願い書を差し出して置いた。

- 一、二月二五日、御頭宗像平次左衛門殿より手紙が届き、来月の正月三日殿様の軍事訓練視察がある、と通達があった。二六日金子善右衛門が勤務交代でやって来たので、右の命令を口頭で伝えた。

- 一、同晦日の夜明けに出立し、正午頃平戸へ着いた。陣笠を請取り、例年の通り御歳暮に出向いた。御組中より樽肴、私は家德利一つを差上げた。御盃、吸物をご馳走になり暮になって旅宿に帰った。喜三次がやって来て、酒などを飲んだ。

文化九壬申みずのえき(一八二二)年

- 一、正月元日朝八時頃より雨降り出し、午前九時過ぎに登城した。午後一時御礼も済ませて御酒を頂いた。午後二時頃に下城。松浦蔵人殿・松浦直記殿へ

の年始の挨拶を終え、旅宿に引取る。食事を済ませて、檜坂・田原崎・大久保・小川・崎方御部屋之坂・堀江・西の久保・新道・高麗町まで年始廻りをする。日暮に及んだので宿へ引取る。組中の者は皆揃った。

- 一、重右衛門・四郎右衛門は病気につき、代理で五郎治と勇右衛門が登城した。ほかにまだ親の跡目を継いでいない者も臨時に登城した。京助・直平・為治・茂八・半之助の全部で五人が揃った。儀平は勤務交代の時に知らせた。

(91頁)

- 一、同二日天気晴れ。午前一〇時頃登城、御組中の礼式のため例年の通り御鑓の間に詰めた。正午頃下城し、直に御頭の所へ向かい、鉄砲の打初めを一通り済ませた。明日は軍事本装束であり、打稽古をしておくべきとの事だったので、五揃いほど打たせて終了した。御盃と御節を頂いて、暮になって帰った。

- 一、同三日天気晴れ。寒気少々風立ち、雪も降っていた。午前五時頃食事を済ませ、午前六時前御頭の元に揃い、午前七時頃檜木馬場に行く。一番先に着いた。午前一一時頃より軍事教練を初め、午後一時頃に終了した。江戸詰の者達の代役には親懸りの者を出して、二〇人揃えた。京助は若党、半之助は小印持ちだった。午後二時過ぎに御頭のお屋敷に戻り、滞りなく終了した。御祝いに樽、肴などを差上げて宿に引取った。旅宿にて神事をし酒が振舞われ、私はじめ小頭中では、この役になってから初めの軍事教練だったので、神酒一升を取り寄せた。形右衛門より年下の者達は皆、ここ二十ヶ年ほどの

間で、初めての事だった。

一、今年の江戸勤めの人員を、去る一月くじ引きで決めた。石井善蔵・石田形右衛門・石田形八・宮嶋寛助・石井原蔵の五人を届出た。

文化九申（一八一二）年正月、儉約・簡略令が通達され、御書附の写しを控えて置いた。去る文化三寅（一八〇六）年江戸御屋敷が類焼し、引続いて御隠居（松浦静山）と御家督の相続に

（92頁）

就ては臨時の出費も多く、屋敷が類焼された時は、御家中一統が志を以て米を上納し、御領分中に御用金も出した。江戸の御屋敷の新築は大概出来上がったが、其後も御公私の物入りが続いている。特に去年春、対馬への引船御用も幕府から受けたので、連年の出費が莫大になり、財政もより一層厳しくなって資金繰りも行届かなくなった。そのため江戸、大坂の商人からの借金も膨大で、今に至ってはますますやり繰りが行き詰り、殿様方も御苦労に思われている。これに依り、当申年より来る戌（文化一一）年まで三ヶ年の間、きびしく節約するように仰せ出された。右に就き、殿様の私的な財政も専ら節約して、どれだけ不自由をされたとしても、是非近年の内に財政事情を整えたいとお考えである。殿様の私用金を初め諸役所のごとは、去年より節約・簡略する政策がとられ、新規の建築、物誂え等は一切禁止され、御修覆等も放置して置けない所だけを取繕い、その他は先送りする様に仰せ出された。同じく殿中向、諸役所に於いても出費を抑

え、節約が専ら行われる様にとのお考えなので、諸向にても切迫してない物は、なるだけ三ヶ年

（93頁）

の間は出費をおさえる様にすべきだ。かつ、財政の事に関わらず、それぞれの部署でも利益が出るような事を思いついたなら、遠慮なくその旨を報告しなさい。これより御家中では上米も仰せ付られるであろうが、長崎ならびに御領分中の外国船に対する備えについてはこれ迄通り、いよいよしっかりと備えなくてはいけないので、此の後も銘々の武器について特に準備しておくように。上米については負担増への配慮から仰せつけられなかった。しかしながらその心得で、衣類等は節約し、たとえ勤めに出る時であっても粗末な服を着用しても構わない。普段の生活でも、贅沢をせずなるだけ質素に暮らし、歳の若い者たちは、文武の技術向上に怠りなく精々よく励むように。右の通り仰せ出されたので、御家中一統、周知する様に取計いなさい。以上

正月

月番

大目付中

（94頁）

一、種子池と谷山の堺を近頃若い者は知らないもので、申（文化一一）年正月一日、老人坂口重右衛門の案内で、坂口留蔵・白石領蔵・真藤右伝次・石井原蔵・松村五郎治が立合い、見覚えて堺や通りの場所を習っておいた。

一、沖四番大井樋の作り直しは、お許しがでた時分に見積りを指出して置いたと

ころ、折原牧右衛門殿が見分致されて、願いの通りに済み、積帳に控えて置いた。申の十一月朔日より仮土肥の建設に取懸る。石工百人・村夫四百人ほど、空の俵八百俵・羽縄二〇束など使った。くわしくは積り控に書いてある。西（文化一三）年三月ごろ完成した。

小原大新田井手表の土取場の土地替え、立ち合って決めた事

一、上ノ手は街道際より道通りまで入れて、一四間五尺（26・7 m）

一、下ノ手は右に同じく平屋敷の端まで、一二間一尺（21・6 m）

一、豎水車床より弥平屋敷端まで

右は以前から大新田井手表土取場所の内、右に相当する代りの土地を差出しました。これは、永く屋敷用の場所として渡したものに相違ありません。

右間敷以外の事は以前の通り土取場です。

右の通り御立合の上で決めたことに相違ありません。

これからも違反がないように、この通り書き置きます。

以上

（95頁）

文化九申（一八二二）六月

山本 弥平

内山 治左衛門 判

後藤戸兵衛 殿

吉永斧左衛門 殿

大浦 宗助 殿

横田直右衛門 殿

金子善右衛門 殿

近藤吉右衛門 殿

西九月朔日 庄屋より請取

右書付け拙宅へ預り置く事

一、前間敷

右は大新田井手の土取場の内、以前右に相当する代地を差出されて、屋敷用の土地に渡したことに相違ありません。右間敷のほか、田畔の方の残った土地については前々の通り土取場です。

右の通り立ち会って確認したことに相違ありません。

以上

（96頁）

文化九申六月

濱使 近藤吉右衛門

小頭 金子善右衛門

同 横田直右衛門

御庄屋 大浦 宗助

大小頭 吉永斧左衛門

御代官 後藤戸兵衛

山本 弥平 殿

内山治左衛門殿 控

御普請組の坂口重右衛門・小浦肝煎利平・儀右衛門・老人利左衛門・一ノ瀬初頭が立合い、右の通り決めた。内山にて酒など出てご馳走になった。

一、大新田土肥へ櫓を植付ける事について、小浦森田兵之助と弟の郷助が、植

える櫓の根さらへなど手入等をする事を条件として、赤崎横土肥の土地を畑にしたいとお願いしているとの噂を聞いていたが、二人が才領近藤左忠次方へ、正式に願書を出したという知らせが来た。

そこで口達書を以て伺ったのは左の通り。

口達案詞

佐々大新田土肥に櫓を御植付けになったので、外瀉塩浜にしている内、横土肥を畑に開拓する事をお許し下されば、櫓の手入等は自費で致します、と願っている者が居るといことですが、右の様な事を所々向々へも相談なく勝手に

(97頁)

お願いする様な者へお許しになられては、どんな者が勝手を言いだすか分かりません。非常に重要な事だと思えます。勝手次第に開発してしまつては、段々土が洗われて土手が壊れ、えごも埋もれて水の流れに支障がでま

すので、御渡しにならないようにと思います。もつとも植えた櫓の手入れは、

管理を私方普請組へ仰せ付け下されば、細心の注意を払い、大新田井樋番、

其の外御普請組者の中へ申し付けて怠り無くやらせますので、この事を宜

しくご通達下さい。 以上

申 六月

吉永斧左衛門

この文書はどこへも渡しておりません。

後藤戸兵衛殿

(98頁)

一、田村久馬右衛門殿が江戸御留守居役に任命され、江戸へ行かれることになった。京助を若党(従者)として遣したところ、一月二五日の暁に下関の下、小倉で船が難破したとのこと、一月二九日に平戸へ知らせが来た。久馬右衛門殿の一行は無事で、船加子二人・大坂の者一人・物懸一人の都合四人が死んだ。一二月七日、一行は平戸へ戻られた。京助は刀と脇差、着物は残らず失ったが、無事に帰宅したことを喜んだ。

一、出口継右衛門が一二月三日に御頭詰交代で平戸へ行つた時、酔っていたのか廣川茂左衛門殿の御屋敷、裏門より入り込んだと言う。御若党御付屋敷へ遣わされた折で、殊に酒に酔ったらしい。そこで、上司の方々は不作法であると旅宿へ戻る様に言われた。勇助がいつしよに戻る途中この事件を起こし、必ず閉じ込めておくように申し付けられた。同四日、牧助と人足を付けて自宅へ帰し閉じ込めて置いた。

(99頁)

一、横田直右衛門の御暇願いと昇格願いを出した。後の小頭は、牧助と兼助の二人から選んで戴くようお願いした。二月二四日、直右衛門・兼助・郷平・半之助に、御用の御尊書が来た。

二月一六日、坂口勇平・志方要蔵が本組を仰せ付けられた。

二月二八日、横田直右衛門は引退後昇格して御徒士組を仰せ付けられた。

右同日、森兼助が小頭を仰せ付けられた。

右同日、横田郷平・出口半之助は本組へ仰せ付けられた。

右の御札に御樽と肴を出し、御祝儀を直右衛門・兼助・郷平・半之助は金百疋ずつ添えた。肴は品薄であったので、生鯛一折、塩鯛一折、外に現金で銭

一貫文、酒八升を差しあげた。郷平・半之助は菓子一袋ずつ差しあげた。

右四人についての正式の記載は、酉正月二〇日の予定。

一、朝鮮通信使の世話の手伝いのため、対馬へ御下向なさる御役人様方の御人数と、江戸を御出立なされる日時書付写し在中

去年の末年、書付を写して控えて置いた。

松平伊豆守様ご領分、三河の国宝飯郡小泉村百姓万平

当辰百九五歳

右の者慶長七寅(一六〇二)年に出生し、有徳院様御代の竹千代様御誕生の節に御城へ召し出され、白髪を献上し、百五〇人扶持を頂戴した。

(100頁)

種姫様がお輿入れになる時に召し出され、白髪を献上したところ、またまた百人扶持を頂戴して、二百五〇人扶持となった。

一、妻 百七三才 子供 五人

一、惣領 百五三才 孫 一八人

一、孫惣領 百三才

右の者達が長命である理由は追々調べるとして、彼らは別に養生もしていない。先祖より代々、毎月両足の三里(膝下にあるツボ)へ灸治をしているだけで、外にこれと言った訳が無い事を申し上げた。その時申し上げた灸治については左の通り。

朔日左_リ 十一 二日左_ニ 十_ヲ 三日左_ニ 十一 四日左_ニ 十一

右_ニ 十_ヲ 右_ニ 九_ツ 右_ニ 十_ヲ 右_ニ 十_ヲ

五 左_ニ 十一 六日左_ニ 九_ツ 七 左_ニ 九_ツ 八日左_ニ 八_ツ

右_ニ 十_ヲ 右_ニ 九_ツ 右_ニ 八_ツ 右_ニ 八_ツ

右の通り、毎月灸治をしていれば、無病長久と先祖より伝えられ、家の者は残らず灸治をしている。当辰九月一五日、御公儀様より御尋ねがあったので申上げた。大坂御陣(元和元一六一五年)の時、万平は十四歳になっていたと言ひ、寛政八丙辰(一七九六)年、万平が江戸に滞留していた時に面談した。長く言ひ伝えるようにと記録する。

右の通り写し取った。

(101頁)

文化八未(二八一)年まで辰年(寛政八)より一六年になる

文化一〇酉(一八一三)年

一、大公儀衆の天文測量方が去年申冬、相神浦賤津へ測量に入られた。

正月十一日大別当より古川大新田土肥を通り、小浦、真申まで磯辺通りのあいだを測量した。午前四時より御先払いのため御組より二人さしだし、同十

二日は当地へ来られ、本蔵谷村屋敷に御泊りになった。御門番に二人、方々の島々廻りの時は御先払いに二人ずつ出た。同十八日江迎へこられ、山ノ田まで御先払いに二人同行した。(一八日は斧左衛門の誤り、一七日が正しい)

一、大新田潮遊びの中にしじみ貝をお放しになるとのこと、種子貝は平戸より届くとの知らせが庄屋よりあった。

一、一番はねの先、志方新田えご、いわし渕えご口渡し場 とん田えごへお放しになり、二月二九日、代官後藤戸兵衛殿・庄屋大浦宗助・筆取濱の喜右衛門・初頭幾之允・吉永斧左衛門が立合った。

(102頁)

文化八年迄康年より十未年に成る

一、申年、江戸下り一〇人のうち五人が中目録を拝領した。これに依り吉良要八、

真藤長左衛門の二人と川下の三人に金二両ずつくたされ、残り五人は三歩ずつ前の通りくたされた。

右の一〇人にて三〇目玉の大筒を一挺制作するように仰せ付かった。

道元留蔵へ申し付けて、酉四月頃出来た。代金四百二二匁は両組一〇人で頂いた金額に割り、分担して支払った。

文化一〇酉年

一、去る江戸下り十人にて、三〇目大筒一挺制作を仰せ付かった。

去る冬より道元留蔵に申しつけ、制作料四百二二匁であった。鑄形一膳込矢を添え、四月二五日に完成し、御頭宗像平次左衛門殿の御宅へ納め、代銀は一〇人で拝領した金高に割合して支払った。

一、出口半之助、二月一六日急に病気になるため出勤出来なくなったので、御組中よりお伺いをしたところ、四月に引退が許可された。

半之助の欠員は半之助大借金前借のため、正米二〇俵の扶持を負擔して補充する御願いを出しておいたところ、牧助の倅直治が願い出、五月八日赤崎井樋戸の小屋で年寄

(103頁)

林助の提案で小頭四人にて検討したところ、米二〇俵のうち一〇俵は近日中に提出し、残り一〇俵は都合が良かったときに少しずつ出す事にまとまった。それぞれ保証して直治もそのようをお願いしてほしいとのことで、明後一〇

日、平戸へ連れて行きそのように決めたいと思う。同九日儀平は平戸へ暇乞いのため行き一泊、翌二〇日平戸へ行き、補充員直治の御組入り許可の御札として御樽肴差上げた。

一、五月二一日、山本直治本組御組入り正式に許可される。

同一五日御組中お祝いの盃があり、直治方へ行く。

一、赤崎喜右衛門が築立てた塩浜が申六月、森田兵之助に渡ったとの事。

仰出され候御書付写し控

二引両のことは元々御家の御印になっており、殊に丸に二引の御紋は御衣類にも附けられていることなので、御庶流のうち、是まで付けていらつしやつた方々はことに、その外右の御紋は勿論、二引はすべて私的な印に用いることは遠慮するように、とのお言葉があった。

右の事は御家中の末々まで承知し、後々に紛らわしいことにならないよう知らせること。

五月

月番

大目付中

(104頁右)

役馬廻以下、立身・加増・御合力・御心付けをいただき、改名・死失など変動のあった者は、勘定奉行へその件を届ける事、御頭よりそのように言いつけられたので書留めておく。

西七月

西七月五日 御頭宗像平次左衛門殿御下命により勘定奉行になられ、大坂御留守居に就任された。九月十六日平戸を出船、同二五日大坂に着かれた由、頭かしらづき附真藤長左衛門・京助若党として御供して登る。御留守中は沖大右衛門殿が御組を預かられる。

一、一月六日夜、佐世保山中役次郎夫婦と子供二人の四人を殺し、家を焼払う事件が起きた。この件で御吟味役が出向かれたとの事。

相神浦吉岡、馬場林蔵弟崎次郎に嫌疑がかかり、その外に懸り合いもある模様である。

一、西八月二二日石田兼右衛門・出口喜三次に内踏が許可された。

同日すぐに大筒稽古、同十四日に終わる。同十五日内踏みとなった二人を善右衛門が連れて拙宅へ来た。

一、西閏一月二二日正福寺へ鐘引きがあった。古今珍しきほど人が集まる催しなので、警固するよう御郡代衆から言ってきた、と戸兵衛殿から連絡があった。正福寺より恵善師使僧にこられ、吉良要八・白石領蔵二人を警固にあたらせた。正福寺住持大病

(105頁右)

との事。同一七日に亡くなられた。

この鐘引きには、春明より李平次殿・喜七殿夫婦家来とも五人連れ、李左衛

門殿父子・藤江殿親子三人、小佐世保より三人見物にこられた。五人は泊り。同一四日鐘保養に呼ばれて行く。銅銭二百文、祝いに包んで行った。

文化二一戌年正月六日夜、森田作之進殿出火し丸焼けであった。

武器は出す事が出来たようだ。

一、正月例の通り年始御挨拶、打初めを終わり、二日には預り頭である沖大右門殿の所で、御手組より先に私・小頭・平組一人御土器取り肴、吸物一つ頂いた。お礼として一樽三升、生鯛一折差上げた。御頭御留守ではあるが、いつも通り御盃、吸物、御節^{おせち}を頂き暮に引取る。同三日帰宅、夜に入り菅右衛門殿の母が死去されたので、明四日の御組中の盃、お節を延期した。同十一日御組中年始に來たので、例の通り吸物、盃、御節にて接待。

一、二月七日石井善藏倅丈助、御普請場見習を申し出たので正式ではないが許す。拙宅へ來られ樽肴など持参あり。

一、三月八日、洪徳寺出火。残らず焼払い門だけ残った由。

(106頁)

一、三月一〇日 金毘羅祭り、家内籠りを相談する。春秋ともそうするよう話し合った。

一、同二六日組の決算勘定があるので船で平戸へ出船、島内に泊る。二七日船で帰着した。

一、江戸から便りが届いた。久家林助が二月二五日に死亡したという知らせがあ

ったので、早々留守に知らせた。

一、後任は父方の従弟、年は二九才左平太が林助の妻と再婚し、後継ぎとして入ることの相談があり、仮御頭様中嶋小左衛門殿へその件を願ひ出たところ、大阪へ聞き合わせるとの事であった。

一、四月三日暁、柴田要四郎殿出火。稽古で平戸に居合わせたので仮御頭沖大右衛門殿へ御頭留守の御見舞い申上げておく。

戊同四月一三日 仮御頭沖大右衛門殿より相達し候写

仰せ出され写

連年打続き公私ともに費用がかさみ、御暮しも大層苦勞されている件では、御領分中へ上米なども毎度申付けられ、一昨年は経費節減も嚴重に指示があった。しかしながら家中給与削減の事は御先代の御厚情で取りやめになったこともあり、容易に実行されなかったが、この度は一層の資金難になり、殿も大変御苦勞されている。皆の難儀を思つて御心を痛めておられるが、先年の通り、当戌年から來たる子年まで三ヶ年、給与削減を言い渡された。家計など質素第一に心掛け、公務も怠らぬよう勤めてほしいとのことである。

(107頁)

仰せ出され写(前文と同意)

連年打続き、御公私御物入り多く、御勝手向は一通りならず御難渋に付て

は、御領分中へ御用銀なども度々被仰せ付られ、一昨年は御省略をも嚴重に仰せ出され候、然処、御家中歩上の義は御先代の厚き思召を以て御返し置かれ候義故、容易に仰せ出されず候義候処、当節に至り次第に御繰詰に相成り一向に御凌方相見得ず

上にも甚だ御苦勞思召し候、之より何も難義不御本意の義存ずべく御心外ながら先年歩上の通り当戌年より来たる子年迄三ヶ年、上米仰せ付られ候間家事取続など質素第一に相心得、御奉公向の義怠り之無き様精々相勤べき旨仰せ出され候

附たり、右の通り仰せ出され候処

年若の面々は、文武修行など不行届義もこれ有り候得共

銘々勘弁を以て油断なく相嗜み候義、肝要思召し候 以上

四月七日

(108頁)

- 一、四月三三日、沖大右衛門殿が新組の御頭になられ、相神浦御普請組は中嶋小左衛門殿が就任された旨、二四日二度便りがあった。二五日、拙者・真藤勇助・出口喜三次、三人平戸へ渡る。二六日御引渡しがあり、佐々組を直ちに預かられた。双方へ樽肴等差上げる。
- 一、久家左平太は御目見得が済み、大坂の宗像殿へ承認の手続き中。

一、左平太の件、六月二二日本組へ配属される。

一、六月一六日暮過ぎ、風吹き出し大風、高潮が満ちた。大うて堀は留めていたが大変心配し、拙者・原蔵・人足・赤崎にいた喜右衛門の娘も加勢して働いたが手およばず、大井樋橋石は潮が超えてしまった。かねの手より蔵ノ下まですべて水が越し、いわし洲土肥は長さ一〇間ほど縦にわれた。原蔵下は一五・六間洪水が洗いくずしてしまった。

一、光明寺塩浜新田の三ヶ所土肥打ち切り、古浜土肥もすべて水が超え、危険に見えた。

一、かねの手塩浜は二ヶ所打ち切り、作られていた塩など残らず流れる。

一、兵之助新田も三ヶ所程打ち切り、家も洗い崩した。

一、別当三ヶ所打ち切り、田は全滅した。

一、志方常平新田は一ヶ打ち切り、翌一七日より修復に取懸り、同一八日潮が止まる。

右のほか所々の家を吹きつぶし、馬屋、小屋も大破し、大木吹きたおれる。

(109頁)

数年にない大風、大船小船、人の被害も数知れずとの噂あり、近年に珍しい事である。

同一七日所々見て回り風見舞い。志方常平所や新田土肥かさ上げ、折原牧右衛門が立合い調査の上、見積もりを出す。小浦古濱土肥も同様に立合い見積りを出す事。いずれも前の通りに修復することで作成する。漸次御普請取懸

り、志方の新田は石田頓平へ請負わせる事。

一、大別当七月八日に潮留、兼右衛門・形八・形右衛門・順蔵を加勢に派遣した。

一、光明寺塩浜も七月一〇日に潮留め、真藤勇助御組三人を加勢に遣した。

一、かねの手塩浜は八月七日潮留め、一〇人程加勢あり。いずれも滞り無く潮留めができた。

一、一〇月六日、中嶋小左衛門殿から便りがあり、石田形右衛門に麻上下着用で来るよう言つて来た。小頭善右衛門へすぐに伝えると、形右衛門は眼病で勝れず、御請に平戸まで登る事が出来ない旨御答えておいた。同一三日に平戸に行き、同一四日伺つた処、私の方から申渡すようお願いつけられた。

一、同一六日、形右衛門を善右衛門が連れて来た。願ひ通り内踏みが許された事を伝えた。正式の御書は去る八日頃のはずとの事。

一、九月四日、十一月八日・九日小筒大筒稽古、広庭にて済む。

一、江戸下り一〇月二日平戸着の由、同二四日自宅へ帰る。同二五日、拙宅へ見える。

一 十一月一〇日夜大雪、西ノ岳筋はつもっている様子に見える。

(110頁)

雪が積り寒強し。九月二〇日頃より、雨天・雪・雨にて年の暮迄しみじみよい天気がない。

一、篠崎奎之丞殿出火あり。

一、一二月二五日夜、鳥居平内殿より出火あり。

一、同二八日午後四時頃、山ノ田火事、小屋小屋まで残らず焼払う。

一、深江與五平殿が大坂勤め申し渡され、一月二三日平戸を出船される由。御頭は交代であろう。

(111頁)

文化十二亥(一八一五)年

一、正月元日雨天、午前十時過ぎ登城して年始御礼済み。御流れ頂戴して午後二時過ぎ下城する。御三家、御老衆へ御年始の挨拶をすませ、夕方御組中揃う。勇助・原蔵・郷平は病気で来なかつた。

一、同一日御組中例の通り年始御礼、稽古終わつて当年より上米あやまいもあることなので、御頭のお節おせちも取りやめ、御神酒ばかりにて済む。樽肴などもいつもの半分差上げた。仮御頭中嶋小左衛門殿へ酒一升五合と小肴を添えて持参。拙者・小頭中に吸物、御神酒をくださった。御頭留守宅へ酒五升、鯛一折用意して御年始に行く。吸物・神酒をいただき小宿に帰る。

一、御頭宗像平次左衛門殿、去年十二月二四日大坂勤めを終え、御乗船になった由。正月一七日平戸に御着のとの事にて、同二一日平戸に登る。拙者・善右衛門・勇助・兼助・形右衛門・嶺左衛門・勇平・佐平にて午後四時頃着く。形右衛門を御屋敷へ遣わした。御供で行つた京助・長左衛門・利三次も滞りなく帰る。同二二日御祝詞。樽肴差し上げ、私は一樽、鴨一羽別に指し上げる。

同二五日御道具引き渡し、大筒三〇目一丁、一〇匁二丁、小左衛門殿より

受取る。樽肴差上げ、同二六日帰る。

一、二月四日大新田土肥の櫓を見分するため、折原牧右衛門殿が来られるので、庄屋と私が面談し打ちあわせておいた。これは、去年の秋ころ書付で伝えてあった事なので、見ておくようにとの事。

(112頁)

一、二月二四日、御頭様依頼の垣、塀、地覆ができ平戸へ積んで行く。船中で私は気分が悪く足が痛み、大変難儀であった。五、六月頃漸く全快。

一、四月二一日に要吉殿が見えられ、次のようなことを言われた。小平次殿のお世話で、久吉を調川の永安十平の養子に欲しいという事で承諾しておいたところ、二七日に同家に入るといふ事であったので其の通りに決めた。

私は足病にて京助・喜助・要吉三人に頼み、三人は同二八日に帰った。

一、三月九日、御頭様より書状がきて、左の通りであった。

御普請組の小頭ひとり、御鉄砲の者九人、五月初旬平戸を出船、六月初旬江戸へ着くように、と去る巳年お言付けであったが、変更して七月初旬平戸を出船、八月初旬江戸に着くよう取計らうこと、 以上

三月 月番

御普請組頭中

右のように言つて来た。同一三日、儀平が交代で江戸へ行くことになっている

ので、承知した旨御返事し御組中へも知らせた。

小浦の諸川常蔵、鍋作りの鑄立て場築きを願ひ出たので、検討して頂いたところ、御許しが出た。その屋敷を立見崎石場下でいいか見てほしいとの事で、小頭善右衛門・牧助を行かせた。差支えはないとの事であったので許す。しかしその後、赤崎深浦口に変更したい由にて、六月頃より取懸り十月頃、はじめてなべ作りがあった。

(113頁)

(35ページ) 享和元年一〇月、東光寺へ大般若経を寄進した折の

運賃など諸経費の明細と思われる

一、縄竹洪紙六枚稲巻

九枚藤作二〇間共に

三貫二百九六文

一、銭四百六四文

伏見迄下し賃

一、同四貫三百二六文

京より伏見迄下し賃

一、同八百二四文

大坂上荷賃

一、同三貫七百八文

大坂より国迄下し賃

一、同六百一八文

大坂より京へ三貫目

■賃

〆二百四〇貫三百文

般若経諸入目